

▶ 記 録

公開シンポジウム 「子育ての危機に迫る」

- 【報告】 秋田光彦(大蓮寺住職・パドマ幼稚園園長)
 梅田美代子(京都造形芸術大学芸術教育研究センター長)
 奥山千鶴子(NPO 法人「びーのびー」理事長)
- 【司会】 矢野智司(京都大学大学院教育学研究科教授)
 桑原知子(京都大学大学院教育学研究科教授)

田中耕治教授(京都大学大学院教育学研究科／教育実践コラボレーション・センター長)

このシンポジウムにご参加いただきました皆様、ほんとにありがとうございます。私のほうから一言、教育実践コラボレーション・センターにつきまして、ご紹介をさせていただきます。本シンポジウムのテーマに関しましては、あとで司会の矢野先生方のほうから、趣旨についてお話をいただきたいと思っております。

コラボレーション・センターについては、パンフレットのほうに詳しく書かれております。われわれは研究科として、教育というものをさまざまな角度から研究をしてみたりしました。そのなかで、それぞれの専門分野で、ある程度の成果をあげてきたのではないかと思っています。しかし実際にわれわれの直面しております教育の問題というものは、それぞれがそれぞれの学問分野で接近をするだけでは、どうも追いつかなくなっており、問題自体がかなり広く深く発生しているように思います。最近の言葉でいいますと、いじめであるとか不登校、学力の低下、さらには児童虐待という言葉が、最近のマスコミを通じて、ほとんど毎日のように流されるという状況にあります。こうした問題が広く深くなってきたということで、われわれ教育学研究科で教育学や心理学を担当しておる者が、この問題について、それこそコラボレーションをしながら、総合的に問題に迫っていく、そのなかで自分たち自身がおこなっている研究そのものを、問い直していこうという意図で、コラボレーション・センターを今から4年前に立ち上げました。

この間、さまざまところのフィールドワークをやってまいりましたが、本年から学校教育の、本当の意味での根幹にかかわります子育ての問題に焦点化をして、このコラボレーション・センターの活動を展開していきたいと考えております。その第1回目のスタートにあたるシンポジウムを、今回このようなかたちで開催することにいたしました。そこでわれわれのコラボレーション・センターの委員会で議論をいたしまして、この方々にお話をいただければ、この問題について深く理解できるのではないかとということで、ご報告の三人の先生方に来ていただきました。一人ひとりの先生方に、2時間でも3時間でも差し上げて、お話をうかがう値打ちがあると思っておりますが、今日は時間の関係で三人の先生方にそれぞれの時間の配分のなかで、今取り組んでいただいております子育ての問題、またそのなかでの、細かな課題についてお話をいただければというふうに考えております。ということで、コラボレーション・センターのこれからの第2弾といいたしめようか、

新しいスタートを切るという今回のシンポジウムでございます。時間の許す限り、皆様方ご参加いただいて、そしてあとで討論の時間も設けておりますので、活発に討論や論議ができますことを期待しております。ほんとに簡単ではございますけれども、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございます。

矢野智司教授(京都大学大学院教育学研究科)

皆さん、こんにちは。前半の司会を担当します京都大学の矢野です。今回「子育ての危機に迫る」というテーマで考えたいと思います。パンフレットにも書いておりますが、簡単にこのシンポジウムの趣旨を説明したいと思います。

新聞記事やニュース報道などを見ても、子育てについて痛ましい事件が次から次と起こっておりますのはご承知のとおりです。「子育ての危機」という主題は、子育てしている親にとっても、子育てが喜びでなく、不安なもの、重荷であるように感じられる時代になってきた、このような事態に対応しています。ところで、新聞やニュースで報道されていますような事件が起こりますと、たいてい子育ての問題が、母子の問題に矮小化されて、母親の責任追求みたいな語られ方が多く見受けられます。しかし考えてみますと、子育てというのは、母子だけの問題ではないのは明らかです。母子の問題だけではなく、家族全体の問題であり、また地域の問題でもあり、さらには学校や行政全体が、取り組むべき課題であると考えます(さしあたり空間的にはこのように考えられます)。

またあらためて「子育ての危機」ということを考えますと、単に母親と子どもというところに焦点化されるべき問題ではなくて、むしろ、人が生まれ死んでいく、生まれ・育てられ、育てる側にまわり、そして死んでいくという、人間のライフサイクル全体における危機ではないかと思います。人は自ら育てられた経験をもとにして育てる側にまわるといふ、人類に綿々と続いてきた、この人間のライフサイクル全体の危機だというように、考えるべきなのだろうと思います(時間的にはこのような広がりであるべき問題です)。

つまりこういうことです。母子関係の問題、家族の問題に収斂していくような、新聞やニュースの報道のされ方をしていますが、それは現在の家族が地域から切り離されているからではないか。ある時期まで地域のなかで家族がちゃんと息づいていて、生活は「面」としてあったのが、地域自体が弱体化し、生活自体が「点と線」になって、かろうじて機能しているのではないか。この事態を、さきほどのライフサイクルの危機ということと結びつけば、子育てをめぐる問題にとどまらず、高齢者の介護の問題も同じところから生じていることがわかります。ライフサイクル全体が、これまでにない変容を余儀なくされているのです。

これまで何とか家族のなかで実現することができた(実際は家族だけで実現されていたわけではなくて、ほかのおじいさんやおばあさんがいたり、地域によって実現されてきた)子育て、それがそういう周りの力が弱くなってしまい、最後に閉じた家族関係に、そして最後の最後にぎりぎりばかりはだかの母子関係にまで痩せてしまった、本当に支えのないところ

にきてしまったのではないのでしょうか。このことはそのまま高齢者の介護の問題などにまでつながっているのではないかと思います。このように問題を考え直しますと、家族だけで、あるいは学校だけで解決できる課題などではないということは、もうはっきりしているのだらうと思います。

早い時期から、このような問題状況に応答し、改善に向けての子育て支援の仕組みや枠組みを作ることに取り組んでこられた人々がおられます。今日は、その取り組みのなかで、成果をあげてこられた3人の方においでいただき、その取り組みについてご報告をいただき、皆さんと一緒にこの「子育ての危機」について考えていきたいと思います。それではパネリストを簡単にご紹介させていただきたいと思います。

私の右側から、秋田光彦さんです。秋田さんはご自身、僧侶で、「パドマ幼稚園」という幼稚園の園長先生でもあります。お寺を拠点にして、まちづくりを積極的に取り組んでこられました。僧侶ですので生き死についてずっと考えてこられました。ライフサイクルの危機についても深い洞察をなされてきました。人間の生の根本課題として、ライフサイクルと結びつけて子育てについてお話しいただくことになっております。

2番目にご発表いただくのは、梅田美代子さんです。梅田さんは京都造形芸術大学の芸術学科の先生で、また京都造形芸術大学芸術教育研究センター長でもあります。京都造形芸術大学というのは、大変にユニークな大学でして、実はその大学のなかにもう一つ大学がある。「こども芸術大学」という名前の大学です。この「こども芸術大学」を設置されて、大学をあげて子育ての支援をされています。この「こども芸術大学」には子どもだけではなくて、親も一緒に登園するのです。「こども芸術大学」の実践についてお話しいたします。

それから2番目の発表者は奥山千鶴子さんです。奥山さんは、2000年に横浜の商店街の空き店舗で、子育て中の親たちによる親子のひろば「びーのびーの」という組織を立ち上げて、その実践から行政をも動かし、横浜を先進的な地域子育ての支援のセンターに変えてしまったという方です。この子育てについての地域の支援ということで、先進的な実践の始まりから現在の課題まで、ご報告いただけるのではないかと思います。それでは秋田さんをお願いしたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

秋田光彦さん(浄土宗大蓮寺住職、應典院代表)

それでは、よろしく願いいたします。私は2時半までということで、お時間をちょうだいいたします。ほんとにいいお天気で、さっき控えて皆さんとお話ししていたんですが、こんないい天気地下の講堂でシンポジウムを聞きに来る人っていはるのかな、とか言いながら、たくさん来ていただいてありがとうございます。私はどちらかというところ子どもの専門家とは、まだ言い難いのかもしれません。さっきご紹介いただいたように、本職は寺の僧侶です。僧侶として地域とか、特に若い人たちの生き方とか、働き方とか、そういうことにかかわってきたんですが、ちょうど私の父が、先代が幼稚園の園長を50年、半世

継続けまして、ちょうどそのバトンタッチが一昨年、2009年にありました。一応肩書きは幼稚園の園長も兼ねておりますが、まだ園長としては2年目なので、子どもの専門家として皆さんの前で、お話しできるほどのキャリアはないんですが、その足りない分はあとお二人の先生の講演でしっかりカバーしていただくということで、私は何とかその導入の部分を務められたらいいなと思っております。

パドマ幼稚園について

お寺とか幼稚園とか、皆さんもなんとなく町なかで目にされることもあると思うのですが、だいたい堀の向こう側にあって、よく全体が見渡せないと思うんですが、これが私が今預かっているお寺と幼稚園の全景です。ちょうど真ん中に切り立った屋根が見えますけども、それがちょうど中心になります大蓮寺というお寺です。それから画面左側に5階建ての、ちょっと幼稚園にはあまり見えないんですが、建物が見えますが、これが今申しあげました私が一昨年園長をしておりますパドマ幼稚園です。ちょうど手前のほうにコンクリートの打ちっぱなしで、ドーム型の建物がありますが、これがもう一つのお寺であるところの應典院です。このように大蓮寺というお寺を中核にしなが、戦後いろんな復興を重ねていきました。この敷地そのものは3000坪近くあるんですが、戦争で全焼してしましまして、戦後は先代がお寺の復興に生涯励んでこられました。その一環として幼稚園が、昭和28年に開園し、そして應典院という、あとでお話をしますが大蓮寺の附属寺院ですね、そういうお寺を私が平成9年に再建をしました。今、世代交代が進みまして、私がこの二つのお寺の住職と、この幼稚園の園長と三つを兼ねております。それぞれ役割が違います。



パドマ幼稚園

幼稚園は、当然子どもたちがいるわけで、3歳から5歳までの子どもたちと、その親の世代です。親の世代といっても、うちの幼稚園は特別かもしれませんが、かなり年齢的には上の方が多いですね。20代の親御さんっていうよりも、むしろほとんどの方が30代、あるいは40代といった方が多いんですけども、その親世代。それから、大蓮寺というお寺は、これはもう文字通り葬式仏教のお寺です。たくさん檀家さんと、日常的に先祖の供養とか、お葬式とかお墓とか、そういったご相談を受け付けている。應典院というお寺はちょっと変わったお寺で、このお寺そのものには檀家さんがいないんです。ですから13年前にお寺を再建したときに、お葬式をしない開かれた場としてのお寺をつくらうということで、新しいコンセプトで始まった、どちらかというと地域創造型といいますか、開かれたお寺としていろんな活動をしています。こちらの應典院のほうには、だいたい若い人を中心に、年間3万人ぐらいの若者たちが集まってくるので、そういう意味でいうと幼稚

園では子どもたち、それから應典院には若者たち、さらに幼稚園の親世代がいて、大蓮寺では高齢者と、まさにオールジェネレーションといえますか、ゆりかごから墓場までといえますか、文字通りすべての生涯に立会うというふうに、私は自分の立場を認識しております。

大蓮寺はちょうど境内で、4月の桜の季節にこういった入園式がおこなわれます。入園式の話をしたわけではないのですが、実はこの入園式を目指して、この10月11日は、来年度うちの幼稚園に入っていただく入園児の保護者の方々の面接をしています。幼稚園ですけど、おかげさまで定員以上の方に来ていただくので、そこを見ながら子どもの、考査などもさせていただくことになっておりまして、100人以上の保護者の方々とお会いして、ずっと10月面談を重ねてまいりました。大したことは聞かないんですよ、おたくの子育ての方針はどんなんですか、とかね。子どもさんの性格はどんなんですかとか、そういう、もうほんとに普通の質問をするんですが、そのときにお母さんに、必ずこういう質問をするんです。最近のお子さんの成長ぶり、お母さんが心から、ああ、うちの子は成長したとか、ああ、この子育てで良かったなと思うような、小さなことでいいですから、そういう出来事、思い出、エピソード、そんなことがあったらお話ししていただけませんかかって言うんですよ。そしたら皆さんうれしそうに、嬉々としてお話しされるんです。たとえば、「うちの子はとても引っ込み思案で、なかなか知らない人にあいさつできなかったんだけど、このあいだマンションのエレベーターで出会ったお隣さんに、初めてこんにちはって、あいさつができたんですよ」って、顔をほころばされるんですね。あるいは、お母さんがちょっと風邪気味で寝込んでしまったときに、小さな息子さんがやって来て、「ママ大丈夫？ママが大変だったら、僕なんでもお手伝いするよってしてくれたんですよ」とかですね。子どもたちと旅行に行ったら。ものすごくきれいな夜空を見上げながら、子どもが初めて、「お母さん、星ってきれいだね」って言ったとかね。そういうことを母親は、もっとも今、自分の子どもの成長として感じる場面として、私たち関係者にうれしそうに報告をしてくれるわけなんです。ささいなことですよ。ささいなことなんです、私たち、子育てとか、家庭問題とかっていうふうに考える前に、そういう非常に些末なこと、本当にささいではあるけれども、大切なこと、子育てのうえで、何が問題なのかという前に、何が、子育てを通して私たちは幸福を感じるんだろうかと、子育ての向こうにどんな希望を見ているんだろうかということが、実はあまりにも問題群が大き過ぎて広過ぎて、むしろその対称形にある希望とか未来が、非常にささやかなことに見えてしまって、ガラスのように繊細な、そういうものに、私たちはあまりきちっと意識を向けてないんじゃないかな、ということたまに思ったりします。そういうささいな、さりげない日常が積み重ねられて、その積み重ねのなかから、じわつとにじみ込んでくるものとして、子育ての幸せっていうものはあるんじゃないかと。僕はもう子育てとっくに卒業しましたので、今はなかなか振り返って、そうだとは言えないんですが、今、僕もお母さんたちと話をしながら、こんなことを感じます。

子育てを「引き」で考える～「死生観」を問う

今日のテーマは『子育ての危機に迫る』というタイトルで、迫るとかいうと、何かテレビの報道特集みたいで、ちょっと引いてしまうんですが、さっき先生もおっしゃったように、ここにこれこれの子育ての問題がある、今すべてがそうですね、問題というレッテルを貼っていますよね。レッテルが貼られると、さもそれが問題であるがごとく、私たちは思ってしまうし、問題がある限り、これは必ず解決法があるんだというふうに思う。これは当然そうあってほしいんですが。ただ、解決法を探ると同時に、犯人探しも始まるわけで、あれが悪い、これが悪いと、子育ての問題が家族間の問題、あるいは母子間の問題というふうに、矮小化されていくということは、私も現場にいて非常によく感じることです。そうではなくて、むしろ子どもを一つ軸にして、もう一度、私たちの地域とか社会とか全体に見渡していく。もちろんプライバシーの問題もあるし、非常に閉じられた課題もあるわけですが、その両方を見渡すような、複眼的なとらえ方としていかないと、いつまでたっても子育ての問題っていうのは、あれが悪い、これが悪いと、危機というバトンを、みんなでリレーして、ぐるぐる回しているというような印象は否めないですね。ですから今日の僕の話は迫るっていうよりも、むしろ「引いて」みたらどうだろうと思うんです。私、映像をやっているんで、寄り引きっていうことで。たとえば女優さんをアップで撮るでしょう。撮ったら女優さん、顔はきれいに映るけど、その女優さんの背景見えないですよ。カメラをズームでずっと引いていくと、その後ろにはきれいなホテルかなと思ったら、なんや違うかったと。そしたらこの女優さんは、お顔は澄ましているけど場所の設定は、市場に夕飯買い物に来た主婦なんだなというような、そういう把握の仕方ってあるじゃないですか。ですから物事っていうのは、ずっと寄りっぱなしで見切るんじゃないで、寄りの視点もありながら、それをずっと引いていくような、そういう寄り引きの、二つの視点があるだろう。子育てというひとつひとつの木々を、どうやって大きな森から見渡すのかというのは、取りあえずトップバッターの私のお役目だと思っています。だからまず、引きの話からしたいと思います。

二つの事例をご紹介します。お寺の住職ですので、寺という場合は、私は開かれた場だというふうにとらえて、お寺の持てる施設や機能を、開きながら、単に場所貸しをやっているということではなくて、その場所にいろんな意味を呼び込みながら、新しい市民協働ということ、目指してきています。子育ての視点というのを、ずっと突き抜けていくと、いかに育つのか、いかに生きるのかの最後に何があるかという、いかに死ぬのかっていうことなんですよ。さっきライフサイクルとお話をされましたが、いかに死ぬのかという焦点から、いかに生きるのか、いかに生まれるのかと引き戻すような、そういう逆転していく視点っていうのが、やっぱり大切じゃないかなと思っていて、子育ての問題と、それから末期ケアとか看取りという死の問題というのは、実は表裏をなしているというふうに今、感じています。いろんなセミナーやっているんですが、最近、『葬式は、要らない』っていう本を書いた島田裕巳さんと対談をしました。葬式仏教は再生するという、こういう

ことをやるともう満杯です。たくさんの方いらっしゃいます。あるいは、遺族ケアとか、最近ではグリーフケアっていうんですけど、悲しみをどのようにサポートしていくのか、というようなワークショップです。下は、釜ヶ崎でずっとカトリックの神父として活躍されている本田哲郎さんっていう方です。本田先生を招きながら、みんなで分かちあいの場をつくったり。それは何をしているかっていうと、当方に、いらっしゃる方は中高年です。つまりお寺という場所を開くことによって、そこに普段、日常的にはあまり意識しない、子育ての問題も、実は日常的に意識されているかどうかであるんですが、特に死の問題っていうのは、ほとんど意識しない。その問題をあえて焦点化することによって、集いをつくり、その集いを単にお勉強の会ではなくて、集まった人同士シェアしていく。そして集まった人同士が自ら気付いていくというような場を、いく通りもつくってきました。もうたぶん何百回となく、つくってきたというふうに考えます。それだけではなくて、それをどのように具体的なコミュニケーション、特にケアというかたちに変えていくのか。あとでお話をしますが、まちづくりなんかもやっていて、そのなかで最近では施設型のケアではなくて、いわゆるコミュニケーションを使ったコミュニティケアという考え方を折り込みながら、僕の場合は、在宅ホスピスということをやっているんですけども、在宅で最後を看取っていく。そういう看取りと、そしてその残された遺族の方々のグリーフケア、こういったことをいろんなかたちで、セミナーや場をつくってまいりました。



大蓮寺

今、この生死を学ぶっていうのは、お葬式がいるとか戒名料が高いとか、こういう話もたくさん、皆さんご関心があるんですが、実はそういうことよりも、こういった極めて実存的な問題に、なぜこんなにたくさん人々の関心が振り向けられるか。これはさっきのお話にもちょっと出てきましたけど、家族間の問題として受け入れられてきたものが、もう家族間だけではなくともならなくなったからです。死の問題っていうのは、長男に任せればよかったんです。残された次の後継社会にゆだねれば、人並みに、今までの慣わしどおりに進んでいったことが、少子化がここまで進んで、そして一人一人の価値感がばらばらになってしまったときに、自分の死は自分の、自分で決めなきゃいけないという、こういうのを死後の自立と言っている社会学者がいますが、死後の自立が今促進しています。ですから哲学の問題というよりも、むしろ生活問題ですね。無縁の問題と一緒に、私はつながっていると思いますが、自分の最期はどのように迎えたいのか、その1つに葬式はこうありたいとか、墓はこうしてくれっていうのがありますが、墓や葬式は単に入口であって、その先にあるのは、どのような看取り、生き方、そしてどのような死後の供養、忘れないでほしいってありますからね。やっぱりこういったことが、家族が分裂していく現代のなかで、新しい課題として突きつけられている。でも、みんなやっぱり言うんですよね、最後まで自分らし

くと。今キーワードは、最後まで自分らしくと、もう1つは迷惑をかけない。この二つなんですよ。なかなか矛盾しているんですけどね。そうやって日本人の死生観が新しく生み変わっているという感じがするんですが、これを死生観とっていいのかどうか、この辺はまだ議論が必要かと思うんです。死生観というつまり、いかに生きるのかということ、いかに死ぬかということはセットであるということです。だから子育ての問題も、実は単に子育てという人生のある分節だけを切り取って、これは子育てですよというふうな定義の仕方だけじゃなくて、全生涯を幅広いレンジでとらえながら、もういっぺん、いろんな人生の分節を再編していくとか。そういう取り組みのなかから、死生観としての子育てというキーワードが見えてくるのではないかなということを思っています。

地域で「働くこと」と学ぶ意味

もう一つの、今日来ている方は若い方が多いので、こっちのほうが関心あると思います。働く意味を学ぶということをやっています。さっき言った、應典院というお寺なんですけども、あのお寺は、申しあげたように若い人たちが大変集まる溜まり場にして、そこには多くは20代後半から30代の人たちが集まってきていますが、私がたまたまこのお寺をつくったとき、ちょうど就職氷河期真っ只中で、以来ごく1、2年例外はありましたが、ほとんど若い人たちは就職難民というかたちで大きな雇用不安に落とし込まれている。そのときにあらためて、皆さんもそうだと思いますが、今の若い人たちは、恐らく日本の戦後史において、若い人たちが初めて哲学的に働くということはどういうことだ、というのを考え始めた人たちではないかというふうに思ったりするんです。給料がいくらだとか、待遇がどうだとか、条件はどうだとかっていう、そういうこともあるんですが、それ以上になぜ働くのか、人はなぜ生きるのかといったこと、就労とかいうことを、一つ自分の課題にしながら、考え始めた人たちだなというのを、ずっと3万人の若者と付き合っていて、私は感じています。さまざまなワークとかですね、セミナーを開いたり。雇用啓発とかですね、雇用支援とか。なんでお寺が雇用支援せなあかんねんと思うんですが、そういうところまで足を踏み込みながら、一緒に働く意味を考えていきたいので。ただ僕は、だから今の雇用環境をなんとかしなきゃいけない、それはそれでなんとかしなきゃいけないんですが、それだけじゃなくて、今の若い人たちが、戦後世代から、いったん断ち切られた自分の人生の行方を、もういっぺん自分たちで再生していこうという試みに大変関心を寄せていて、その1つが地域参加ですね。モデルがないっていうのは、つまり先行モデルがないということです。地域参加で自立しようという若者が出てきたのは、恐らく初めてじゃないですか、今。僕が10年前にやっていたときには、NPO法が1998年にできて、NPOがあって、コミュニティビジネスっていいだして、最近は社会企業とかっていうんですけども、この事業スタイルに共通しているのは、まず1つは前の世代におもねらないということですね。今までの拡大再生産型の日本型ビジネスモデルにおもねらない。逆に地域における公正性とか、幸せとか希望とか、極めて抽象的なことですが、こういったことを自

分が働くということと重ね合わせながら、考えようとした人たちです。そういう意味でいうと、僕は 30 代の友人たくさんいるんですが、この人たちがこれから日本の社会を、少しずつ変えていくんじゃないかという期待も思っているわけです。言いたいことは、働くということに、そういう価値が問われるようになってきたということです。さっき人間は、いかに死ぬのかということの、生そのものを問うんだって言いましたが、若い人たちからすると、死の問題はあまりにも遠すぎるので、逆にいうと、働くということを通して、自分の生きる道をとらえ始める。

この今言った二つの事例は、対象も内容も全然違うんですが、共通するのは私たちがなんのために学ぶのかということをお問うていると思うんです。私たちはなんのために学ぶのか。資格がほしいからか。卒業証書がほしいから。次のステージ上がるための通行手形がほしいから、私たちは学ぶのか。ではなくて、これまで日本の学習システムが問うてきた組織とか効率とか評価とか、そういったものじゃなくて、個人一人一人がどう生きるのかということをお問う、問い直すために自ら学んでいく。ここにはですから先生はいないんです。報告者はいますけどね。教えてくれる先生はいないんです。だからカリキュラムもない。学び集う者が主体にならざるを得ない。そこから立ち起こっていく、自分の人生の生き直し。私は、生き直しってキーワードだと思っているんですが、そのことと、そのあと後半お話をする子育ての話っていうのは、どこかで符合しているというふうには思っているんです。これはお寺でやっているような、アートワークの話なんです。たとえば箱庭療法をやっていたり、自分の出会ったグリーフ、悲しみを、あて先のない手紙に書いて、それをほとけ様の前の浄焚っていうんですが、清らかな火にくべて、消滅させるということ。悲しみを焼き切るという仏教の法要があるんです。それをアーティストと一緒にやった写真です。何が言いたいかという、つまり与えられたテキストが、与えられたカリキュラムが、そして与えられた最終的なゴールがあるんじゃないかと、人と人が出会うこととか、異なるものと出会うこととか、目に見えないものをつなぐとか。あるいは悩みを通して成長するとか。悲しみを共有しながら、人はつながっていくとかっていう、どっちかっていうと追いやられてきたものを、もういっぺんステージに取り戻して、私たちの学びのかたちを書き換えていこうということをお、活動を通してやってきたわけです。



應典院

おとなも育つ「相互性」を保証する

今まで話したのが、さっき言った引き、引いて話をしました。今度はずっとカメラを、もうちょっと正面に近づけて行って、寄りの話をしたいと思います。今申しあげたように、私は幼児教育の、最前線にいるといってもいいと思います。幼稚園の園長として、今、幼稚園大変なんです。ご存じかどうか分かりませんが、幼保一元化という、百年に一回の大

転換期を今迎えておりまして、あれほど連日のように、新聞紙上に幼稚園・保育園なんていう呼称が飛び交うのは、いいのか悪いのか、極めてまれなことだと思うんです。ただそれは、たぶん子育てとか教育とかってということよりも、むしろ社会保障として書かれているんですね。あるいは労働政策といいますか。これからの働き手、担い手を、いかに社会的に保障していくのかということが、この政策の根幹にあるんであって、子育てはいかにあるべきなのかとか、幼児教育はどうあるべきなのかというような議論を、国会でするわけでは全然ないので、そこは誤解のないようにしてほしいのです。いろんなことがいわれていますが、少子良育、少なく生んで賢く育てるという志向が、ますます強くなるだろうと。簡単にいうと、やっぱり教育の市場化っていうのは、ますます促進されざるを得ないだろうなと思っています。これはもう、非常に冷たくそう言い切って間違いないと思います。少なく生んで良く育てるといような志向性が高まっていくと、少しでも良い教育をさせたいという親の熱意が、どんどん増幅していく。それが決してわが子にとっていいこと、良い結果を生むかどうかはわからないんですが、そういう膨らみ方、欲求に対して応えていくのは、消費至上主義なんです。現場に行かれたらわかりますが、幼稚園のみならず、たくさんの塾があります。最近ではインターナショナル・スクールっていうのが、はやっているんです。保育園、0歳1歳からネイティブの外国人教師のところに入れて、一番にグッド・モーニングですから。おはようございます、と言う前にグッド・モーニングで育てるんですね。おはしを使う前にナイフとフォークですね。それこそ都心部の塾なんかをやっている、そういうところはかなり人気なので、たくさんの親子が行ったりしているんですが、いったい子どもを育てるっていうことは何なのか。親の自己実現を達成するためのものなのか。あるいは、非常に高度な投資なのか。こういうことよくいわれますよね。子どもに投資をする。そういうかたちを受けて、幼児教育にまつわる、子育て市場っていいかもしれません、子育て市場というのが活性化していく。今回の幼保一元化を、あるいは今やっている子ども手当でも、同じような構造があるわけなんです。

僕はやっぱりなぜ子育てを、子育てという、子どもの成長のみをうながす営みとして考えるのかと思うんですね。非常に子育てに対する見方が一元的ですね。そういう一元的な、一方的な子育ての押し付けというもののなかで、私たちは子育ての持っている可能性を、むしろ大きく取りこぼしているんじゃないか、見逃してしまっているんじゃないかということ、つくづく感じます。子どもだけが子育てされているのではない。われわれおとなも、子どもから多くのことを学ぶ。おとなが親として成熟することが、すなわちこの子育てというものの相互性。互いに育ち育てられるという相互性を保障していくのであって、そこにおとなが、親が、人間として、子育てを通して成熟していくという視点がない限り、子育ては徹底的に市場のほうへ持ち込まれていくという感じがします。だから幼稚園とか保育園っていうのはなんなのかという、この二者関係を、保障することだとも思っています。この二つの円の真ん中にあるのは幼稚園、保育園だと思うんです。実際そう思うんですが、現場でどうなっているかという、なかなか難しい、そう簡単にいかないという

感じもあります。いろんなことをやっています、これは應典院でやった子どもシティという、まちづくりの、おとなと子どもでやっていくワークなんです。街にはいろんな仕事があるよね、いろんな職業があるよね、市長さんは君だよ、とかね。君、市議員だよとか言いながら、小学校の中学年から高学年ぐらいの子どもたちと一緒に、おとながわいわいやっていくんです。そういうダンボールでつくった街を通して、公益とは何かとか、公正とは何かとか、正義とは何かとか、そんなことを親は語らないですよ、そういったことを、やっぱり分かちあうんですね。ときには我慢せなあかんねんな、とかね。ときには人に譲らなあかんねんな、というようなことを、こういうワークを通じながら学んでいく。これは子どもだけではないですよ。おとなが、リーダーとか、ファシリテーターで入っているんですけれども、子どもからたくさんのおとなのことを教えてもらう。

これは人が写っていませんけども、ケイスケ展といたしまして、ケイスケっていうのは名前ですけども、小児がんで亡くなった子どもさんがいます。その子どもさんの末期のあいだ、ずっとベッドサイドに通い続けたアーティストがいるんですが、そのアーティストとともに、ケイスケが好きだった写真や絵を、親御さんと一緒につくりあげていく。これは遺作展でもあるんですが、亡くなったのちも、その子どもから私たち、親や、あるいは私たち、これにかかわったおとなたちが、多くのことをケイスケから教えられていく。こういうふうに、子育てっていうのは、一方的にプレゼンターがいてプレゼントを、一方的にギブするというわけではない。私たちは相互に関係を往還させている。そういう呼吸運動が、子育てにとっても大事なんじゃないかというふうに思います。柏木恵子さんっていう方が、本のなかで、親となることの成長発達という話をしていて、そうだなと思うんです。さっき冒頭で申しあげた、さりげないけど、大切なことってあるよねっていうことは、実は言葉にすると、こういうことなんじゃないかと。親となることによって、おとなはどのように成長発達していくのか。すごく物事が、考えるのが柔軟になったとか、相手を受け入れやすくなったとか。運命とか信仰もあります。僕は一番注目しているのは、自己抑制です。自己抑制というのは、現代人にとってもっとも大切なことだと思います。こういった人間が成長していく機会としての子育ていうものを、どういうふうにポジティブにとらえていくのか。あるいはそういう場をどういうふうに提供していくのかというのが、今とても大切なことなんじゃないかと思うんです。ソーシャル・キャピタルなんて言葉よく使います。私たちの人間社会っていうのは、決して目に見える資本だけで動いているわけではないです。高速道路があって、ビルがあってショッピングセンターがあつたら、街は幸せなんじゃないじゃないですか。人と人がどのように、お互いに思い合うのか。そしてどこかで我慢したり、譲り合ったりしながら、互いをサポートしていくのかという、そういう考え方の根幹になる関係性の原資として、私は子育てというものは、ものすごく大きな魅力を持っていると思うんです。その魅力が十分に社会に届けられてない。

「子育て」ができる環境～「他者」とのかかわり合い

幼稚園の園長先生としてもう一個言っておくと、「子育て」と「子育て」っていうもの

でバッティングってあるんです。これはよくいわれていることなんです、子育てっていうのは、基本的に誰がっていうと、おとなが子育てするんです。ということは、子どもは一方的に受身である、受容される存在であると思っていますが、そうじゃないですよ。皆さんもたぶん、記憶はないかもしれませんが、自分でいろんなことを選んだり、自分で拒否したり、自分で立ち上がっていくという、人間はそもそも原始の段階から自ら学ぶ存在である。その自らが学ぶということの、子育てというものを、もっと保障せないかんのではないかという議論があると思うんです。子育て過剰論のなかには、こういった子育ての可能性とか、子育ての萌芽っていうものを、摘み取ってしまう。そしてそれを、先回り先回りすることによって、でき上がった子育てのシステムに乗せてしまうという弊害は、これは幼稚園の現場のなかでもないとはいえません。いろんな意味で、私たち考えなきゃいけないところだなというふうに思っています。むしろその集団社会のなかで、非常に多様なかかわりを通して、子どもが自ら子育てしていくような環境をどうつくっていくのかっていうのが、うちのパドマ幼稚園のこういう教育のメソッドの、時間がないのであまり詳しく説明しませんが、頭も心も体も、全面的に発達していくための総合幼児教育を推進しています。モデルは簡単にいうと、僧堂の教育です。僧堂教育、お坊さんの僧に堂内の堂です。僧堂教育っていうのは、いっぺん皆さん調べてみたら面白いと思うんですが、集団生活なんですよ。一定の規律があるんです。そして全体的に暗黙知といいますか、ほとんど意味のわからないことをやっているんです。修行って僕もやりましたが、あんまり意味わからない。近代的ないう意味っていうのはわからない。わからないけど、それが自分のなかにどんどん、どんどんにじみ込んでいく。だから非常に身体的な知だと思います。近代的な意味での学びの、学びの下ごしらえといったのは、内田樹さんですけど、それを下ごしらえしていくような、そういう教育だっていうふうに私たちは思っています。言いたいことは、子どもの主体性は教えられて身に付くものではないということです。子どもが自ら、周りの環境とかかかわりながら、自ら、自分から獲得していくものであって、そのための環境づくりとして、私たちは課題が必要だと思っているんです。場が必要だと思っている。

それから共同、コラボレーションも必要です。そしてそのあと共感とか共鳴、共体験とか、その一番土台になっているのは、お寺でやっている幼稚園なので、やっぱり大きなものとのつながりなんですよ。仏教教育の指標は、そこにあると思います。自分の力で生きているんじゃない、大きなものに生かされている。畏敬の念なんて、よくいいますけれども、自ら育つということを担保していくというか、自ら育つっていうのは、自力主義ではないんです。自ら生きるということを担保する旅という、大きなほとけの叡智がある、そういうふうに仏教では考えます。大乘仏教というのは、お釈迦様の仏教とずいぶん違うんです。お釈迦様の仏教というのは、基本的には個人の悟りとか解脱っていうことを追求していくわけで、基本的にそれ以外のことに、あまり関心ないですね。社会がどうあるか、関心が薄いんですよ。だから世俗とはかかわらないといった、極めて内省的な教えがお釈

迦様の仏教ですが、大乘仏教が興ると、仏教は極めて社会的な教えになります。一言でいうと、他者というものを発見する。お釈迦様の仏教では、他者というより、徹底的に自己、自己洞察なんです。自己だけを追求していくんですが、当然それは、中国とか東アジアへ流れてきた仏教の変遷と関係があると思うんですが、自己と他者とのかかわりのなかで、私たちは生かされている。その関係性において、私もあなたも相互に生かされている。これは縁起説ってというのが根本に来ているんですが、そういう他者像というものを獲得しています。つまり自分は他者なくして、自分であり得ないってことです。そうですよね。鏡見ながら、自分は自分だと思っている人いないでしょう。友だちと会って話すから、自分は自分だと思うんでしょう。鏡だけの世界で、自分は誰だと、自己定義できないですよ。そういうふうにして、鏡の向こう側にある世界とか社会っていうものを見抜こうとしたのが、大乘仏教の、僕は大変な大発見だと思っているんです。

宮沢賢治は、大変熱心な仏教徒です。彼は『法華経』の、非常に熱心な信者ですが、彼が有名な言葉を残しています。世界全体が幸せでない限り、個人の幸せなどあり得ない。世界全体が幸せでない限り、個人の幸せはあり得ない、と彼がそういつているのは、まさに大乘仏教の教えそのものなんです。お釈迦様は、個人の苦、個人の問題ということはずっと追求した人ですが、大乘仏教はそれを世界の苦だというふうに変換をさせた。個人の苦を、個人の責任として、子育てをその当事者の家族の問題として背負い込むんじゃなくて、その個人苦を世界全体が見逃せない、自分も同じ共有する苦だと、そこを背負いながら、あなたの痛みは私の痛みである、あなたが救われるならば私も救われるという、そういう教義を打ち立てたというのは、大乘仏教の偉いところなんです。だから慈悲行なんて、慈悲っていうのは、皆さん、たぶん誤解していると思いますが、仏様が何か清らかにいらっしゃって、下々に対して恵んで下さるんじゃないんですよ。やはり自己と他者が切り離せない。自他不二と書いてあるのは、自己と他者を切り離さない。この二つはつながっている。そのつながりのなかで、それぞれが、相互に作用しながら互いを生かし合うというのが、この大乘仏教の教えの根本です。言い換えれば、小さきものを自己に引き当てて生き直す。これは僕の言葉です。小さきものっていうのは子どもです。子どもをおとなという自己に引き当てて生き直すということが、大乘仏教でいつている慈悲論です。ですからおとなという権力者、おとなという有力者が、何も知らない無知な子どもたちに、何かを恵んであげるという考え方ではないということです。ここは間違っはいけないことだと思っています。今日僕らの住んでいる社会というのは、何ごとも利害とか損得で全部囲い込まれているわけです。逆にいうと、関係ないやつは全部切り捨てるわけです。親子関係もそれと似ていませんか。うちの子だけ、うちの子だけっていうふうに関わり込んでいく。幼稚園も実は、そういう面があるんですよ。うちの幼稚園は、というふうに関わり込んでいく。そのなかで子どもは、さっき言ったように小さな消費者としてしつけられていく。あるいは未来の投資の対象になったりしていくという現実もあると思うんです。子どもが本来持っている他者性、子どもが私たちに何かを気付かせてくれる、子どもが私たちの何か

を揺さぶってくれる、そういうものに対する積極的な評価というのは、今なかなかできにくい。親だけではなくて、おとな全体が、今考えなくてはならないことじゃないかな、と思っています。

おとなの「生き直し」としての子育て

最後にまちづくりの話をして終わりたいと思います。今最近、僕はまちづくりのことにいろいろかかわっていて、上町台地っていうんですが、大阪の都心にあるですね、四天王寺とか大阪城とか、いろんな歴史的な建物があったりして、文教地区といわれているところなんですね。お寺があったり、病院があったり、学校があったり、都心居住では大変人気のあるところで、もうマンションばんばん建つんです。そういうのって全部不動産のチラシになっちゃうんですよね。あこがれの都心居住とかいってね。ホスピタリティがどうのこうのとかね。ううん、なんか違うんちゃうかなんか思っていて。つまり、私らが住んでいる街っていうのは、なんで子どもがおんねんっていうことを考えなあかんのちゃうと思うんですね。子どもって今完全に忌避されていますから。うちの幼稚園でもクレームいっぱいあるわけですよ。それは親御さんじゃなくて、隣のマンションからいっぱいあるわけです。子どもが太鼓の練習をしたら、うるさい。電車のなかで、子どもがいた母親が降りるときに、そこにおったおっちゃんが、おまえら殺すぞって言ったと、新聞の投書欄で見ることがあります。子どもがいるっていうことが許せない。非常に不寛容な社会に、今なっています。にもかかわらず、うちの幼稚園は都心のど真ん中にあるんですが、なんで都会の真ん中に子どもがおるの、こんなに、っていうことを、もういっぺん私たちは読み直さないかんと思うんですよね。それ学校やからじゃなくて。なんでここに子どもがいるの。それはそこに来ている親御さんだけではなくて、地域社会全体が、一度考えないかんことではないか。家族が、子どもと共に生きるって、どういうことなんですとか。もっといえ、地域社会が幸福になっていくとはどういうことですか、というようなことを、街のなかでやっぱり議論をしていく必要があるんじゃないかと思うんです。まちづくりはそんな悠長なことはいっておられなくて、いろんな安全の問題とかあるから、優先順位は確かに高くはないんだけど、この上町台地はある意味ではゆとりのある街なので、こういう街にこそ、僕はそういう、生老病死といいますが、いのちについての課題を考えるきっかけにしたいと思っています。

ローカリティの力がすごく弱まっていると思います。なんでもかんでもグローバルに、丸め込まれ、飲み込まれている。市場っていうのはグローバルに動いていくわけですけど。そのなかでローカルな声をもっと無数に出していくことによって、かろうじてそういうグローバルなものとの緊張関係を持っていくというか。グローバルってなかなか凌駕することは難しいかもしれないけども、そういう一つの大事な架け橋が、私は子育てということにもつながればというふうに思っています。ですから繰り返しますが、子どもの、子育てのことを、家族問題だとか教育問題だとか、社会保障だとか、そういうカテゴリに閉じ込め

ない。どうやって、引いて引いて、引いて見ていくのかということと、引きっぱなしになって、なんか他人事になっちゃ困るんで、それを逆にもういっぺん寄り戻していくときに、子育ての価値っていうものが見えてくるんじゃないかなと思います。おとなが人間として生き直すための、営みとしての学びとは何なのか。学校システムっていうのは、基本的に成長していくことを教えているわけ。成長原理です。でもその学校システムでは教えられないことがあります。人間はときに諦めなあかんねんとかね。諦めることは、学校で教えてくれないじゃないですか。夢は叶うっていうふうにいるわけじゃないですか。しかしときには運命に逆らわずに、受容していくとかね。我慢に我慢を重ねるとか。子育てって、基本的に我慢ですから。ボタン押したらこうなるってものじゃないので。そういったもう一つの学びというものを、子育てというのは私たちに伝えてくれるんじゃないかと。もっと言えば、それを学びとして受け止められるような地域社会というものをつくっていかないと、生き直しとしての子育ては、空文句に終わってしまうというふうに思っています。取りあえず、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

梅田美代子さん(京都造形芸術大学芸術教育研究センター長)

梅田と申します。よろしく申し上げます。「こども芸術大学」の活動紹介をさせていただきます。

こども芸術大学が開学する少し前のお話からさせていただきたいと思います。1977年に北白川の瓜生山に現京都造形芸術大学の前身である京都芸術短期大学が「開かれた大学」を掲げて開学しました。そして「児童図書館ピッコリー」が大学図書館に併設してつくられました。この「児童図書館ピッコリー」は新しい人間関係の共生の場づくりを指向する、また、地域社会との接点を持って、地域に根ざした場として開設をしようということでした。それは子どもたちが自由にその場所に入出りできる場であり、そこに子育てをするお母さんが自由に来て、図書館機能を持ちながら、地域との関わりを深めてきた場所です。ピッコリーはその後30年以上、今も存続していますが、野外サークル、キャンプ、おはなし会、工作会や、トットクラブなど、地域の子ども、子育て中のお母さんたちを対象にした交流の場であり、気づきの場として活動を展開してきました。その間に京都芸術短期大学から京都造形芸術大学へ改組転換しましたが、現在まで児童図書館ピッコリーの活動は開設当時の方針のままに、地域に根ざした場になっています。ピッコリーの活動をベースにしてこども芸術大学の構想が生まれました。ですからこの児童図書館ピッコリーが、こども芸術大学の種のようなものではないかと思っています。皆さんのお手元にお配りしているパンフレットの中に、2002年に『母なる大地を求めて』という、徳山理事長の熱い思いが語られています。そして、この思いがこども芸術大学の開学につながっていきます。先ほど矢野先生は、お若い頃にピッコリーでボランティアのお手伝いをしてくださっていたという話をうかがって、ご縁を感じました。

今回は「子育ての危機に迫る」というテーマですが、近頃子どもたちがかかわる悲しい

事件や急にキレる子どもたちのことがテレビのニュースや新聞紙面を賑わしています。また子どもの遊びの環境も変化してきています。核家族が増え、子育てのなかで母親は孤独感を感じているようです。このように様々なことが子どもの周りで起こっています。そういう状況のなかで、芸術大学の役割を問いました。

ひとり一人の心のなかに生命を慈しみ、人を思う温かく育む気持ちが芽生えるようにとの願いのもと、2005年にこども芸術大学はそれらを使命として開設しました。京都造形芸術大学は、芸術系の大学です。こども芸術大学は大学附置機関として京都造形芸術大学のキャンパスの中にあります。京都造形芸術大学は通学部と通信教育があります。18歳からの若い通学部の学生と、社会人を含む広い年齢層を対象にした通信教育部があり芸術教育を行なっています。そしてそこに幼児教育が加わりました。こども芸術大学ができたことで、幼児から社会人に至るまでの、一連の軸をなす芸術教育がはじまりました。

こども芸術大学の教育の考え方

こども芸術大学は、自然と芸術を謳っています。よく芸術系の大学なので、芸術の英才教育をしているんですかとか、山でのサバイバル教室や野外教室をしているんですかとか聞かれます。けれどここでは、ごく当たり前の生活の一つずつ大切に、日々感動や発見を繰り返しながら保育をしています。教育目標に挙げている「感じる力」、「工夫する力」、「伝える力」を養いながら、ともに生きていく基礎を子どもたちやお母さんたちと一緒に築く場になればと活動が続けています。東山のちょうど銀閣寺から少し北に上がったところの瓜生山の麓にこども芸術大学はあります。その立地の自然を生かした活動や芸術大学なのでその芸術をリソースとして保育をしています。

こども芸術大学は、子どもだけではなく、お母さんも一緒に通っています。たまにはお父さんも来られます。3歳から小学校に上がる前までの子どもたちが対象ですが、年少、年中、年長といったクラス分けをしない混合保育をしています。お母さんが共に通って来られるので、当然生まれたばかりの赤ちゃんや1歳、2歳の弟や妹も一緒に通って来ます。弟や妹、お父さん、お母さん、お腹が大きくてお母さんが通って来られない場合は、おじいちゃんやおばあちゃんが来られることもあります。子どもは長期間休むと次に登校したとき、なかなか遊びの輪の中に入れていないことがあるので、おじいちゃん、おばあちゃんに連れて来てもらっています。そして、お母さんたちはおじいちゃんやおばあちゃんから子育てのことや生活の知恵などを教わることもあります。昔の地域で子育てをしているような場になっていると思います。もう一つは、大学のキャンパス内にあるので、学生も当然いますし、海外からのアーティストがこども芸術大学を訪れることもあります。様々なおとなたちとの出会いの中で子どもたちは生活をしています。子どもだけを隔離した世界ではなく、社会と同じ構成の中で子どもが育っています。また、スタッフも芸術教育士という呼び方をしています。保育士や幼稚園教諭の経歴をもった者もいますが、保育関係ではない経歴のスタッフもいます。彼らはお母さんと子どもたちをつなぐファシリテーターと

しての役割を担っています。こども芸術大学では芸術教育士の役割は重要なポジションです。子どもたちの成長を育む日々の活動を組み立てます。またお母さんたちが考えた子どもとの活動をサポートしたり、親の子育ての悩みに寄り添ったり、気づかない子どもの様子をお母さんたちに伝えたりします。

こども芸術大学の一日

一日の流れは、9時にお母さんと子どもが登校してきます。年少児のお母さんは基本的に毎日登校し、子どもの様子をじっくりとかかわり、見て欲しいと思っています。子どもを見るということは以外に難しく、お母さんたちに「子どもをよく見てね、よく見てね」って伝えても「見る」ってどういうことなのか、なかなか伝わらないことがあります。それでも毎日子どもと一緒に活動し、触れ合っていくことで子どもを知ることができるようになってきます。そして子どもからいろいろな気づきも得られるようになります。そして、お母さんたちは徐々に子どもを見るということがどういうことなのかを理解してくださるようになります。

こども芸術大学では、「瓜生山日記」と名付けていますが、朝登校したときに、その日の子どもの様子や体調、お母さんの気持ち、母の目標などを書いてもらっています。帰りにも、その日の活動とその日の出来事を書いてもらっています。そこには子どもの成長を喜ぶ言葉や親の気づき、子育て中の親の葛藤などが書かれています。3年間の貴重な子育て日記です。

こども芸術大学では「遊びと学びの時間」、「対話の時間」、「創作の時間」、「気づきの時間」などを設定しています。順番にご紹介させていただきます。

遊びと学びの時間

「遊びと学びの時間」は、朝9時に子どもとお母さんが登校して来ますが、登校してす

ぐに活動が始まるのではなく、親も子も1日の活動の前にウォーミングアップする時間です。それぞれの子どもの様子が見える時間です。子どもひとり一人が、自分の興味のあることを遊びで展開したり、お母さんと一緒に山の畑に出掛けたりします。親子がゆったりと過ごし、子ども同士で自由に遊ぶ時間です。子どもが納得するまで遊べたり、ゆっくり親子で過ごせた日は、次の活動が落ち着き、いい雰囲気で行なうことができます。「遊びと学びの時間」は親にとっても子どもにとっても、大切な時間だと思います。

時にはけんかをすることもあります。けんかをすることもひとつのコミュニケーションだと考えています。自分の思いのたけを吐き出すことで、自分の感情が芽生え、成長につながっていくように思っています。ですから余程のけんかの場合は親やスタッフが中に入りますが、殆ど子どもたちが子ども同士で解決するようにスタッフもお母さんも見守っています。

こども芸術大学には親がいます。全員揃わないにしても、スタッフやお母さん、とかなりの数のおとながいます。時には学生も活動に入る場合もありますので、誰かが子どもの様子を見ている状況にあります。その子どもの育ちを見てそれぞれが様々なことを考え、気づきを得る時間でもあります。

この写真は、大きなお腹のお母さんを囲む子どもたちです。お母さんのお腹が日に日に大きくなっていくのを子どもは見ています。お母さんからお腹の赤ちゃんのことを聞いたりすると、これ、縄跳びの縄ですが、子ども同士でお臍のところに当てて、臍の緒ごっこをはじめたりします。今は一人っ子が多いと思いますが、



こども芸術大学にいると本当に少子化なのだろうかと思うほど、2人産んでしんどかったけどもう1人欲しいと言うお母さんもいます。一人で育てているのではなくて、みんなで子どもを育てているという環境にあるからでしょうか。

今年は下の子がたくさんいます。下の子がいると年少児もお姉ちゃんやお兄ちゃんのような振る舞いをし、子どもなりの優しさが芽生えてきます。あるとき、年少さん、年中さ



んのけんかの時に、年長が少し割って入ってきて、「なんでそんな悪いことしたんや」、とか、「小さい分からはんから、もう許したり」、とか子どもながらに仲裁をして解決する姿が見られます。スタッフやお父さんお母さんが、普段言っていることを、子どもたちはよく聞いていたり、見ていたり、それを真似ながら育っていると実感します。



これはお茶会の様子です。ちっちゃなお茶人と書いていますが、人にお茶を振る舞うことを教わった年長の子が、また下の子にこういうふうふうに真似て教えています。

これは「創作の時間」で作ったもので遊んでいます。「創作の時間」は作る過程やその後の展開も大事に考えています。作り終えたら終わりではないんです。作った後に子どもたちの手で違う形で遊びに展開していくことが多々見られます。これは、ダンボールに絵を描いた時のものですが、しばらく活動ルームに置いておくと、子どもたちが引っ張り出して、いろんな遊びを展開してくれます。



こども芸術大学は、既製のおもちゃを殆ど置いていません。子どもたちは工夫する力を持っていて、日常的に山へ行っていろいろなものを見つけてきます。それを材料に自分で工夫して遊ぶこともできるようになってきています。子どもは遊びの天才だなといつも思います。雨が降ったら部屋の中で遊びましょうというのはおとなの発想だと思うんです。子どもは、雨が降っていても外でこの写真のように水が溜まっているところを見たら遊びたい



と思うんです。山の枝を拾ってきて、スタッフに魚を紙で作ってもらって、雨の中で魚釣りをはじめたりします。また竹の割ったものを見つけると、つないでダムを作ったりしはじめます。そして一人では出来ないことも力を合わせて作り上げる面白さを体験していきます。遊びの中で、だんだん子どもなりの社会を築いていくように思います。

対話の時間

次に、「対話の時間」です。子ども中心の保育です。ここでもやはり「感じる力」や「工夫する力」、「伝える力」を育むための活動をしています。基本的にはお母さんも活動に入ります。

これは山で摘んできた、よもぎ団子を子どもたちと一緒に作っている写真です。山で摘んできたものや、畑やベランダで育てたものなどがおやつになることもあります。お誕生会にはケーキやクッキーも作ります。子どもはお母さんが自分たちのために作ってくれていることをよく見て、親の思いを感じているようです。



これはお誕生会です。お誕生会は毎月行いますが、4月初めのお誕生会は入学したての年少児は困るようです。子どもから誕生月の子どもたちへプレゼントを贈りますが、その子のことを知らないとなかなかプレゼントが作れないようです。プレゼントはその人のことを思いながら作るということなのでしょうね。

これは、お母さんと一緒に活動で使う縄跳びの縄を作っています。お母さんとの共有の楽しい時間もその出来上がったものに込められているからでしょうか、愛着をもって使います。



先程からの写真では子どもは勿論ですが、お母さんの表情が生き生きとしているのがお分かりだと思います。入学した1年目は親も硬くて、なかなか活動の中に飛び込めない。ちょっと様子を見ているような感じがあります。少し時間が経って次第に慣れてくると、今度は子育ての悩みがいろいろ出てきます。そんな時、同じ場所にいるお母さん同士が悩みを共有したり、想いの違いでぶつかったりを繰り返しながら、だんだん自分を解放できるようになってきます。そしてお母さん同士の信頼関係が生まれてきます。表情も変化してきます。その頃には自分の子どもだけではなく、他所の子どももみんな自分の子どものように思えてくるようです。

これはお母さんの膝でいす取りゲームをしています。膝に座っているのは、それぞれ自分の子どもではないんです。親子が入れ替わっているんですが、このような光景はよく見られます。お母さんに叱られた子どもが他所のお母さんのお膝に行って、気持ちを落ちつけていたり、他所のお母さんから褒めてもらったり、叱られたりということが自然に行なわれ、みんなで育てているという感じでした。



これは、山の上の畑に土を運んでいる写真です。瓜生山はそんなに高い山ではないのですが、それでも、土を運ぶのはおとなでも楽ではありません。そして山の上の土は、本当に作物が育つ畑になるのだろうかと思うような荒地でした。水道也没有。でも、そういうところに畑を作る意味があると、この山の上に畑を作りました。畑で作物を育てることだけが学びではありません。作物を育てるためには水を運ばないといけないとか、土を運ばないといけないことなどを子どもたちは自然に覚えていきます。山の畑に土を持って行ったら、きっとお芋がたくさん収穫できるだろうとか、水をあげないとかわいそうとか、想像しながら工夫をし、行動する。建物の側であれば便利で楽ですが山の上に作った理由はここにあります。もうひとつあります。畑へ行くまでの山道でいろいろ寄り道をしながらいろんなものに出会い、発見があるからです。寄り道は子どもたちにたくさんの学びをくれます。瓜生山には畑ができる前からここに棲んでいる動物がいます。その動物たちも作物が育つのを待っています。せつかく作ったものも、全部お猿さんに食べられたということもあります。でも、収穫できたときはジャガイモをお猿さんにも分けてあげようと全部収穫しないで、畑に残しておいてあげようと子どもたちから提案します。子どもたちにはお猿さんや山に棲む生きものも仲間なんですね。



創作の時間

次に「創作の時間」です。芸術系の大学なので、どうしても創作の時間と聞くと芸術の英才教育をしているように思われることが多いです。造形活動をしながら、親は子どもの見方、感じ方、他者を理解するための方法などを身につけていきます。子どもたちは創作の時間で出会う芸術家の柔軟なものの考え方や作品の取り組み方に興味を示します。そして、遊びのなかで工夫するヒントをもらうようです。工夫する力や感じる力、伝える力を身につけるひとつの方法だと考えています。そういう意味においては芸術という方法を用いて保育をしています。子どもと一緒にものづくりをすることで、親が気づくこともたくさんあります。

親子でコミュニケーションを取りながら一緒に制作しています。

お母さんは子どもの話す言葉を側



にいて聞き上手になり、また子どもの想像力を広げるための上手な声の掛け方を学んでいきます。お母さんに寄り添ってもらっていることを感じて子どもの世界が膨らんでいきます。

ここで「創作の時間」で描かれたものをご紹介します。子どもたちの絵のモチーフの殆どは日常的に体験し、見たこと、感じたことが描かれています。子どもが裏山で過ごしたときに心が動いたこと、家族でどこかに行ったときのことが描かれています。



この絵は画面が殆ど白く塗られています。川を描いた絵です。これは長野に行ったときに、川の水面が白くきらきら光っているところを描いたようです。お母さんは白を塗りだした我が子が何を描いているのか、はじめは分からなかったようです。一緒に手を動かしながら子どもの話に耳を傾けていくうちに、長野の川を描いていたことが分かったようです。この子はこういうところ

を見ていたのか、感じていたのかということを知る機会になります。

次の絵は山で感じた光の中に、そこで出会った昆虫たちを描いています。その次は田植えの絵です。自分たちが田植えをした田んぼをキラキラした紙を貼って表現しています。



「創作の時間」後に担当教員を交えて、子どもとの関わりの中で気づいたことや感想を聞き合います。制作することも勿論大切ですが親にとっての気づきや学びがたくさん詰まった時間です。この振り返りは重要だと考えています。



もう少し創作の時間のご紹介をします。これは、お地蔵様を作るというワークショップです。

このお地蔵さんの頭の上に瓢箪の種を蒔いて育てます。毎日水をやると、どんどんお地蔵さんは壊れて、ここに芽が生えてきます。育てていくと同時に、お地蔵さんは小さくなっていく。不条理ですね。言葉では伝えませんが、子

どもたちにそういったことを感じてもらいました。

これは、大きなモビールを作るというワークショップです。浮



力を感じるというものです。ヘリウムガスで膨らませた風船に紐を付けて、その紐の下に山で拾ってきた葉っぱなどを結びつけます。軽かったら飛んでいってしまう。重たかったら全然浮かばないという微妙なバランスを親子で体験します。それぞれの親子が作ったものを全部つなぐと大きなモビールができます。逆モビールですね。お母さんたちは、振り返りでバランスをとるといふことはどういうことなのかを考える機会になったなどと話してくれます。美しく均衡が取れているものだけが美しいのではないことに気づいたりします。



これは、音を感じるワークショップです。聴くということは年少児にはなかなか難しいですが、小さなオルゴールを使って行いました。小さなオルゴールの音を聴くために耳を近づける、自分のほうから体を合わせていく。自分がその中に入っていくことによって同じ音でも音の感じ方が変化する。この写真は、子どもが聴くことを行動で示

しています。お母さんたちは普段、自分の周りにある意識しないと聴こえない音、意識し過ぎるとうるさく感じる音、騒音と思っていた音も出していた人を理解することで騒音ではなくなるなど、子どもの何気ない行動から音をとおして人間関係について考える時間になりました。

これは、山での「創作の時間」です。毎日遊びの場にしている山をどれだけ普段見ているかを知るためのワークショップです。大学で森林について研究されている先生と一緒に裏山へ出かけました。専門家の先生と山を歩くことで、子どもたちの意識が変わっていきます。今年は楢枯れが多く、樹木がたくさん枯れていることも子どもたちは感じています。遊びながら森を理解していると感じます。山では自然の葉っぱや木の



実などの材料を使って、お絵描きや造形遊びをしました。

これは、変身をしています。自分が何かに変わることによって、心も変わるということを体験しました。お母さんが、ベランダにアゲハの幼虫を持ってこられて、その成長を観察することで、チョウチョが羽化し羽を広げる姿を子どもたちは見て

います。蝶々に変身した子は、動きがしなやかになりました。

折り紙で動物園を作るワークショップ



です。大きな紙を折って好きな動物を作ります。折り紙というと、おとなはきちっと折らないといけないと思ってしまいます。けれど子どもたちは、切ったり貼ったり平気でします。それで最初にこちらが設定したこととは変わってしまうことになるのですが、お手本どおりに作るのではなく、自分でこういう形にしたいという思いの強さみたいなものが、結果的には生き生きとした形で表現されます。

このワークショップが終わった時に担当の先生から子どもたちへプレゼントがありました。小さなカエルの折り紙です。カエルの中に「元気に育てよ」と、メッセージが密かに書かれていました。秘密だったので、先生はおっしゃらなかったのですが、子どもはふとした拍子に見つけました。ある日スタッフがパレスチナの難民キャンプへ研修に行くことを知った子どもたちからパレスチナの子どもたちに千羽鶴を折ろうと、そして、そのときに、カエルの折り紙のことを覚えていたのか、折り紙のなかにメッセージを書こうという提案が子どもたちから出たそうです。遠く離れた逢ったこともない子どものことを思い、つながることができる子どもたちは素敵だと思います。

気づきの時間

こども芸術大学では、親の振り返りの時間や話し合いの時間がたくさんあります。いろんな気づきを共有する時間です。その日の子どもの様子や親やスタッフが気づいたことなどを共有する「一日の振り返り」。創作の時間後に担当の大学教員を交えての「創作の時間の振り返り」、年度末にはこの1年子どもと共に過ごして得た親の気づきを振り返る「気づきの時間」などがあります。

この写真はこども芸術大学の活動ルームにみんなで丸く円陣を組んで座っています。子



どもたちも同じように、いろんな場面で話し合いをしますが、お母さんたちも子育て中の悩みはたくさんあります。ときには親同士の思いの違いでぶつかることもあります。そんな時みんなで丸くなって座って話をすると、気持ちも丸くなって和やかに話し合いができたりします。行事の内容を決めるときや子どもの間

でおこった小さなトラブルのことや力を合わせて何かをしなければいけないときなど、お母さん同士がきちんと向き合い、共に考え、自ら行動して欲しいと思っています。

大学生は興味のない話でも一応聞いていてくれますが、子どもたちはそうはいきません。興味が無かったら、どこかに行って別のことをはじめますが、関わるおとなが子どもの前で謙虚になれば子どもたちが良いように助けてくれることも、学ばせてくれることも本当にたくさんあります。

こども芸術大学は、みんなが育っています。子どもも育つ、親も育つ、それから先生も育つ、学生も育つ。みんなで育ち合いをする場になってきたと感じています。まだまだ、お伝えしたいことやお見せしたい写真はたくさんあります。記録に残している写真の数だけこども芸術大学にはドラマがあり、その度に悩んだり喜んだり、そしてそこには親や関わるおとなの気づきも同じだけあるように思います。

こども芸術大学は開学から6年になりました。こども芸術大学はまだ組織としては試行錯誤の最中ですが、教育目標の「感じる力」「工夫する力」「伝える力」を日々の様々な活動を繰り返す中で確実に積み重ねられ、開学の理念である私たちの心の中に「母なる大地」を回復し、生命を慈しみ、人を思う温かい気持ちが親子ひとり一人に芽生えてきているように感じています。

矢野先生から今回のお話をいただいた時になぜ、こども芸術大学は「大学」という名称になったのか聞かれました。ここは子どもの保育をベースにしながら親やおとなの気づきの場所でもあるからだと思います。おとなの気づきはそれまで受けてきた教育や環境で培われたことの中で生まれることが多いと思います。そして気づきの答えはそれぞれが考え、自らの学びにつなげます。ですから、こども芸術大学は誰かが答えを出す場ではないように思います。親が子どもの成長を願い、そして子どもと共に成長する。京都造形芸術大学は「芸術と平和」を謳っています。そこに関わる人たちとよりよい未来を築くために一緒に考える場になればと思っています。報告が長くなりました、ありがとうございました。

矢野智司教授

ありがとうございました。こども芸術大学に見学させてもらったことがあります。そのときに、ちょうどけんかがあって。私は、実は昔、けんかの研究というか、幼児のけんかを研究していたことがあるんです。けんかを見たいわけじゃなくて、子どもがどういふふうに仲直りしていくのかっていうのを見る。そのとき、こども芸術大学のけんかについて、親、先生方が輪になって話をされていました。先生方は、これまでにたくさんの知識や経験もあるでしょうけれど、こどもたちの考えを伝えるというよりは、むしろ親が持っている気づきや考え方みたいなものを手がかりにしながら、深めていくような印象があります。とても印象的でした。それでは、奥山さんをお願いしたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

奥山千鶴子さん(NPO 法人びーのびーの理事長)

横浜からまいりました奥山と申します。どうぞよろしく申し上げます。横浜から来たと申しましたが、私の出身地は青森県八戸市です。ちょっと想像がつかまずでしょうか、どのへんか。青森県の太平洋側で、イカの水揚げが日本一というような、そういう港町で育ちました。今、ウミネコの島があるというのでも有名なところですよ。私自身、18歳までその町で育ち、小学生のころは、イカの箱っていうのは、昔は木の箱だったんですね。今は

プラスチックになりましたけども、そのイカ箱で、基地を作って遊ぶというような小学生の時代を送りました。大学に入るときに関東に出てきて、そのあとちょうど1985年ですから、男女雇用機会均等法の前の年ですが、就職をいたしました。就職するときには、大きな会社に就職したくないということで、100人ぐらいの中小の企業に就職をいたしました。国内外の会議ですとか、それから学会のお世話をする会社だったんですね。ですから、当時はけっこう京都に来ていました。久しぶりに京都にまいりまして、ああ、なんか懐かしいなあっていう感じです。その会社で、育休の第一号取得者として育児休業を取りました。会社のほうも応援してくれたのですが、当時もう横浜に引っ越してましたので、通勤時間が1時間弱かかり、非常にやはりつらかったですね。そんなこともあって、一年会社に復帰して辞めました。ですから、一年休んで一年仕事に復帰しましたから、長男が2歳のときに専業主婦として地域にデビューすることになりました。

「子育てひろば」をはじめたきっかけ

いざ横浜で仕事に復帰しながら子育てを始めると、本当に忙しかったので、帰って子どもと一緒にいる時間がとても貴重に思っていました。退職後はやれやれ、これで子どもとずっと一緒にかかわれるって思ったんですが、それも束の間でしたね。2歳の息子は、とにかくわんぱくな子でした。一日中追いかけて回している。まだ2歳児っていうと、言葉もはっきりしませんから、彼が何を考えているのかということ想像しながら、日々時間どおりにいかないというストレスを抱えながら、子育てを始めるわけです。そのときに出会ったお母さんたちと、NPOを立ち上げて、子育てひろばというものを始めるわけです。京都は、非常に児童館が多いところというふうに聞いております。どなたか、自転車で三ヶ所ぐらい、すぐに行ける児童館がありますなんていうことを教えてくれましたけど、横浜には一館もないんですね。365万人の都市です、18区ございますけれども、一館もないんですね。そこで私たちがどこで子育てをしていたかというところ公園です。公園を根城に、お弁当とおやつと水筒を持って、公園に朝から夕方までいるんですね。あとから幼稚園に入って、あの公園にいたお母さんたち、ちょっと感じ悪かったって言われましたけどね。行く場所がなかったんですね。もちろん、親同士で子どもを見合いながら、ときどきスーパーに行く人とか、ときどき用を足しに行く人とかいましてね、子どもを見合いながらとにかくそうやって公園で活動していたんですね。

そんななかで、ひとつ行政との出会いがありまして、「子育て通信」というのを、地元

の港北区のほうでつくることがありまして、それにボランティアで、子どもを連れてかかわるようになりました。私も行政の子育て支援というのはこんなものなんだということを体験する

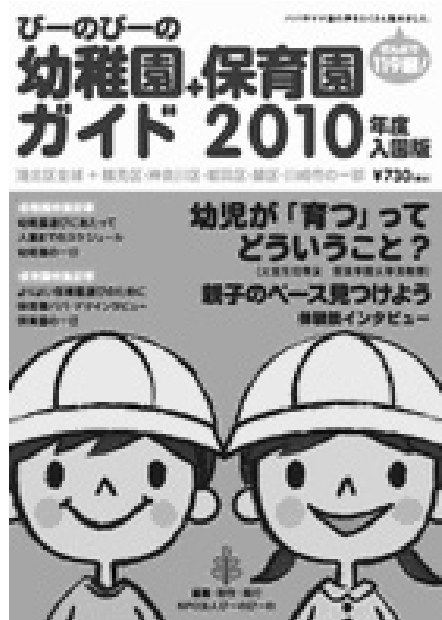


なかで、今、子育て中の親がちょっと大変だなんて思っていたり、これはどうなっているんだろうと思っていることと、行政が子育て支援だと言っていることとの間にはとても溝があって、それをなんとかつなげられないのかなとか、親の声をもっと行政に聞いてもらいたいなという思いが募ってきて、活動につながってきたというようなことがあります。今日、最初の秋田先生の話のなかでいうと、私はもう子育てっていう非常に小さな密室の親子二人の関係から、もっと広く子育て仲間を得て、それから行政だとか社会に、逆に地域などに広げていったって意味では、引きの視点で少しずつ広げていったというような感じかなって思っております。

国の資料とか見ると、とにかく日本は子どもはどんどん減ってきていて、皆さんがずっとおっしゃるとおり、とても子どもが育ちにくい国になりつつあるという気がいたします。それはなんなんだろうかということを考えながら、日々活動しています。最近、結婚のハードルということもあるのかなと思います。私自身は、非常にバブル期に仕事していたこともあって、黙っているとなんか生活していけちゃうという気がしていました。当時ですよ。結婚したのは30歳なんですね。20代、ずうっともう仕事ばかりしていて、縁がなかったら、結婚しなくても別にいいかもしれないかね、そういうふうに思う時期がありました。出会いがあって、結婚することができて、これもご縁だなと思うわけですけども。32歳で第一子です。当時、30代で産むっていうと、やっぱりちょっと遅いかなあって感じしましたが、今はもう、ほんとに私たちの子育てひろばに来るお母さんたち、ひととお仕事をしてからって方も多いです。今でも、やっぱり七割の方が、結婚して正職員を辞めています。そういうなかで、自分が今までずっとやってきたことをなげうって結婚することっていうことに、躊躇してしまうっていうのはあるなあっていうふうに感じます。たぶん、男性のほうは、当時と今と違うかもしれないんですけど、やはり妻と子どもを養えるぐらい経済力がないと結婚できない。いろんなデータを見ても、女性が相手に対して経済力を求めるとか、それから男性のほうも、女性に対して、当時ですよ、やはり子どもはちゃんと見てほしい、仕事は辞めてほしいというふうに思っていた。今はだいぶ違ってきていると思います。今の広場見ていると、両方とも働かないと、落ち着いたら復帰したいというような形になってきています。

子育てへの不安と支えあい

当時、私たち公園でよく話していたのは、幼稚園の話なんですね。どこの幼稚園入れるかってことが、とても公園で話題に上っていました。それね、とっても風評なんですね。3歳で年少さんで幼稚園に入れようと思うとどこがいいのかという話が、公園でずうっとされているわけです。そのときに、三日並んだと。入園するのに三日並んだっていうようなこ



とが聞こえてくると、親はもう焦るわけですね。いい園に入れようと思ったら、並ばなきゃいけないのか。もっと情報をキャッチしなきゃいけないのか。だけれども、聞こえてくるのは、中身、保育内容ではないんですね。もっと私は、当時、幼稚園や保育園のことが知りたいと思いましたし、それからもっと、教育理念だとか園がどういう考えで子どもたちを見てくれるのかということについて、知りたいと思いました。そこで、「びーのびーの」っていうのは、親子の居場所なんですけど、並行して実は、幼稚園・保育園ガイドっていうのを作ったんです。それは、親の口コミだけに左右されない、そして私たち親も、ちゃんと幼稚園・保育園のことを学ぶ、そして行って見てくるということです。それは乳幼児から、集団保育につながるときに、園バスがあればいい、給食があればいい、延長保育があればいいと、そういうことではなくて、やはり子どもが選べないとしたら、親がきちんと選べるだけの力を持とうよと、そういう意味でこういったガイドを並行して作るというような活動をしてきました。

結婚のハードルだけじゃなくて、出産にもハードルがある。一人目は会社の制度があれば、サポートがあればという話も聞きますし、二人目は、やっぱり妻だけじゃなくって、夫の協力があればとかですね。それから三人目は、一部勢いっていう。私なんか勢いでしたけれども、経済的余裕がないと、という話も聞こえてくるわけです。ですけど、先ほど先生方もおっしゃっていたとおり、私も仲間がいて、そして育ちあうって関係がある。もしくは預けてもいい。預けあえるって関係ができてくると、子どもは実は何人いてもいいのかなあと。もちろんお金はかかるんですけども、もっともっと荷が軽くなってくる。経済的な問題だけじゃないってことを実感しながら、子育てひろばの活動をしてきました。ただ、やはり子育ての孤立化、不安感っていうのは、とても高いなと思います。というのは、やはり自分の育った土地で子育てできない女性は本当に多いです。私もそうです。横浜は新参者の集まりです。うちのスタッフはですね、北海道から沖縄までおります。そういう人たちが集まる場所なんですね。ですから、来る人たちは、転勤してきました、三日前に引っ越してきたっていう人たちもいて、子育ての前に生活情報だっという人たちもいます。海外から戻ってきたっていう人や、国際結婚したって方たちもいらっしゃる。そういうなかで、昔ながらのコミュニティというところに頼れない、祖父母はいつも周りにいるわけじゃない、そういう人たちに、どうやったら支えあいのコミュニティというのを作れるのか。そういう挑戦でもあるなというふうに思っています。

やっぱり、自分が子育てしていて、子育てに優しくない社会だなあって思うこともありました。ですけども、それは自分たちからももっともっと地域に出て行ったり、発信しなくちゃいけないということでもあるなというふうに思います。また、やっぱり介護とおんなじで、子育てっていうのは家族がやって当たり前、親がやって当たり前、特に母親がやって当たり前っていうなかで、非常に社会化が遅れた、支援が遅れた分野かなというふうに思います。それは、対サービスということではありません。もっと子どもを中心に、今まで日本でできていたことができなくなってきたとしたら、また地域を耕すために、何

か支援が必要じゃないかなって思う思いであります。私自身も子育てに苦労したということであると、18歳で一人暮らしでずっと結婚するまで、やはり生活感というのがなかったって思っています。子どもが産まれて、すごくいろんなことを取り戻しました。ですから、子どもが産まれるってことは、とてもいいきっかけなんだと思っています。それをうまく、子育て世代の人たちに伝えていきたいという思いがあります。

親子のひろば「びーのびーの」

自分の育った土地でないところでの子育てのとまどい、そして、保健所での通信づくり、そして仲間づくりがあって、それから、幼稚園・保育園ガイドをつくり、そして最終的に公園を根城にしてきた私たちですが、場所がほしいというのがありました。当時、幼稚園保育園はあっても、乳幼児期の0歳から3歳の部分の、専用の居場所ってというのがなかなかなかった。それを目的に立ち上げたところがあったんですね。東京都の武蔵野市っていうところに、「0123 吉祥寺」っていうのができました。これはたぶん、公的に未満児さんの親子の場に特化してつくった第一号だったと思います。そこを見せていただいたときに、「あっ、専業主婦の私たちも、こういう場所がほしいって言っていいんだ」という思いを募らせたんですね。それで児童館がない横浜ですけれども、私たちにとって、こういった乳幼児の親も育ちあえるそういった場がほしい。そこで、商店街の空き店舗を借りて、親子の広場「びーのびーの」というものをつくり上げてきました。本当に子育て当事者のお母さんたちです。幼稚園に子どもが行っている間、午前中場所を守るよっていうような人たち。それから子どもを連れてかかわる人たち。みんな当事者で、シフトを決めて居場所を回す。自分の子どもも、それから来る方たちも、一緒にその場を回していく。そういうような子育て広場でした。そのなかでシニアの方々の支援というのもありました。学生さんたちにも来てもらいました。というのは、夏休みなるとですね、自分たちの子どもも幼稚園がお休みになって連れてくることになる。ちっちゃい子たちも来るっていうなかで、まず学生さんたちに来てもらって、自分たちの子どもも一緒に遊んでもらうというなかで、活動を継続していったんです。

このような活動が行政の目にとまって、実は二年後に、「つどいの広場事業」という国の事業になりました。私たちがモデルになってこんな事業になるなんて、私たちもびっくりしました。でもこれは、国が事業化するといっても、自分の地元の横浜市がやってくれないとだめなんですね。初めて行政をお願いに行きました。本当にお母さんたちなんてどこに行ったらいいのって感じだったんですけども、当時は保育課ですとか、それから一人親の支援、福祉の部分でサポートはするけれども、専業主婦の皆さんを対応する部署はないっていうふうに言われました。当時、福祉局っていう名前ですね、保育課しかない。今は、どこの市区町村も子ども青少年局とか、子ども局っていうふうに変わってきましたよね。この10年で大きな変化だったと思います。すべての子育て家庭の支援を視野に入れていくっていうふうに変ってきていますが、それは私たちにとっても、社会も大きく

変わっていくなかでの、活動の展開だったのかなあというふうに思います。当時、横浜でもなんとか「つどいの広場事業」が立ちあがり、私たちも手を上げて、公募でそこに入ることができました。当時、8年前になりますけれども、全国でたった28か所しかなかったんですね。それが今、全国で1500か所になりました。やはり、地域でこういう乳幼児の居場所がほしいという、そういったNPOの人たちの後押しもあって、全国にどんどん増えてまいりました。特に私たちは資格を持っているわけではありません。でも、その子どもを育てている仲間、であり地域のなかで同じ立場の人たちに、そういった支援を届けたいという、そういう思いで、これまで広がってきました。だから、研修も必要ですし、ネットワークづくりも必要です。いろんな人たちの支援が必要です。そういう意味で研修をやるために、実は、この広場事業の中間支援組織のようなものも立ちあげてですね、活動を広げてきています。今、菊名という、港北区のなかにある、菊名、大倉山という非常に限られた地域ではありますが、とことんその地域にこだわり、子どもにとってのふろさとづくりという思いで活動をしています。

最初は自分の子どもだけしか見えなかった親たちが、この広場を通じて、みんなの幸せ、みんなの子育てへ展開していく。先ほど、ちょっとこども芸術大学の方でもお話ありましたが、広場っていうのはデパートの休憩スペースとはちょっと違うんですね。やはり、どの子がどの親の子かわからないです。もうぐちゃぐちゃになっている。けんかもあるし、おもちゃの取り合いもある。でも、そこに子どもの学びあいもあるし、親の学びあいもあります。スタッフはそこを親にも、どう気づいてもらえるか。それから親も子どもも育つためにどういうふうに関わったらいいか。前面に出るのではなくて、コーディネーターとして、ファシリテーターとして存在するものです。そのあたりの学びあいというのをしながら、この広場という場を運営してきています。小さいハイハイするような赤ちゃんも、関心があれば、年長の子どもたちが使っていたおもちゃがあいたら、すごい勢いでははいして取りに行こうっていうふうに、それはお家のなかだけではできない子育てですね。ここで小さな集団としての学びっていうのがあります。親たちもその子どもたちというのを真ん中に据えながら、自分たちがいろいろなことを経験しています。最初はきれいな場所じゃないと気になるというお母さんもいました。それから、もういつもうちの子やられてばかりいるの、どうしたらいいですかという人もいた。だけれどもそんななかで、子どもたちには育つ力があるということに気づいていく。実は、その親たちも育つ力がある。親もやっぱり1年生。私も、本当に、最初親になったときに、もう長男には謝らなくてはいけないことたくさんありました。ですけども、経験のなかで積み重ねるなかで、いろんなことを学ばせていただきました。子育てって、本当に先生がおっしゃるとおり、そのとおりだなあっていうふうに思っています。

NPO(特定非営利活動) 法人 **びーのびーの**

.....地域で共に育ち合う子育て環境づくりを目指して.....



**親と子のつどいの広場事業
おやこの広場 びーのびーの**

拠点

<横浜市社会福祉協議会「親と子のつどいの広場事業」>
2000年4月開設。商店街の空き店舗を借り上げて、子育て当事者で立ち上げた子育てひろば。0~3歳の未就園児とその保護者が対象。利用者である会員やスタッフ、ボランティア、地域の人たちと共に、子どもの遊びや育ちを見守り出会うひろば。子どもも大人も居心地の良い居場所づくりを目指して取り組む。






港北区地域子育て支援拠点 どうろつぷ

◆**港北区地域子育て支援拠点委託事業**
2006年9月開設。市内在住0~3歳を中心とした未就園児が会員登録。横浜市次世代育成支援行動計画「かがやけ横浜子どもプラン」における「区」に1つの支援拠点モデル事業として開設。5つの要請(親子の居場所事業/相談事業/子育て情報の収集発信事業/ネットワーク事業/人材育成事業)に総合的に取り組むための拠点として運営。

◆**港北区子育て応援メールマガジン「ココめ〜る」委託事業**
2007年より港北区内未就園児を持つ親、妊婦向けにメールマガジン形式で情報発信を行う。区内で子育て支援に関わる多様な方々による編集委員会を組織。そのメンバーのネットワークで情報収集を行い、どうろつぷが編集作業を行う。

◆**横浜市子育てサポートシステム港北区支部事務局**
地域の中で子どもを預けたり、預かったりすることで人と人とのつながりを広げ、地域ぐるみでの子育て支援をめざす「横浜市子育てサポートシステム」の港北区支部の事務局を担う。






◆**預かり保育事業「ゆーのびーの」**
「びーのびーの」のひろばを使って毎週火曜日
2~3歳児の少人数での預かり保育を実施。幼児期の預かりへのニーズに対応、預かりを通じて親との信頼関係を築き、地域の理解を得ながら活動している。

事業




◆**子育て関連情報の編集・制作・販売**
・**広報紙「びーのびーの通信」の発行(毎月)** 法人全体の事業や子育て関連情報を紹介
・**幼稚園・保育園ガイドの発行(年1回)** 港北区および周辺地域の園情報を掲載

◆**ウェブサイト 港北区子育て応援マップ「ココマップ」の制作・運営**
<港北区社会福祉協議会委託事業> <http://www.kouhokushakyo.or.jp>
2004年9月、子育て情報サイトを開設。子育て当事者らによる編集委員会を毎月開催し、特集ページの作成、子育て関連イベント情報の提供など、充実したサイトを制作・運営している。

◆**新名WARA-びー実行委員会**
小学生を中心に親子でまちの歴史を学び、交流を深めることを目指した地域交流事業。

◆**わくわく子育てサポーター**
学生ボランティアによる乳幼児家庭への育児支援事業。次世代の親となる学生に乳幼児との交流機会を提供し、学生が地域の子育てに参加する「子育ての社会化」への可能性を探る。

◆**ブログ「とれおんパーク」の制作(2008~2010)**
<株式会社トヨタオートモールクリエイティブ業務委託事業> <http://www.tressa-yokohama.jp/>
トレッサ横浜(横浜区内大型商業施設)HP内ブログ「とれおんパーク」や「ペンがガイド」の記事を子育て世代の視点から作成。

事務局

◆**NPO法人びーのびーの事務局**
正会員・準会員の管理をはじめ、対外的な窓口としての役割を果たす。
〒222-0037
横浜市港北区大倉山3-5T-3
TEL:045-540-1422
FAX:045-540-1421
URL:<http://www.bi-no.org>

◆**NPO法人子育てひろば**
全国連絡協議会事務局
全国の子育てひろばの会員組織を研修事業・調査事業などでサポート。
〒222-0037
横浜市港北区大倉山3-19-18
TEL:045-531-2888
FAX:045-512-4971
URL:<http://www.npo-kobae.com>






行政・地域との連携の広がり

その後、行政からは、もうちょっと大きな事業もやってみないかということで、委託事業で、毎日 80 組ぐらい来るような大きな事業も任されるようになりました。横浜は今、この施設を 18 区に一館ずつ作っていかうということで、来年の春には全部できあがってきます。その一館目を私たちのほうで受託いたしました。公設じゃないですね、地域の人に建てていただきました。最初横浜市は、今、行政も財政難なので、建物を所有するっていうのはなかなか難しいですから、空いている公的施設を使うか、あとはビルのテナントでやれということが多いです。私たちも、最初、ビルのテナントでやれと言われました。一生懸命、いろいろ場所を探したんですけども、なかなかやっぱり、パチンコ屋の2階は嫌だなあとか、いろいろあって、いい物件が見つからなかったんです。そんななかで、

家賃を払うということは、その家賃収入はあてにしていけないので、その家賃がある程度まとまって払えるから、どなたか建てていただけませんか。そういうかたちではどうかと、私たちが逆に、行政に提案いたしました。そんな人はいるのかと。いや、いないかもしれないけど、まず探しましょうということで、町内会を通じて、建ててくれる人を探しました。そのときには、行政も一緒になって探してくれました。横浜市といっても、やっぱり巨大な田舎なんですね。江戸時代から、鎌倉時代から住んでいる方がいらっしゃいます。皆さん、元農家の方ですね。地元の方は、「そんなに子育て困っているの？」と言います。はた目には、あまり子ども、子育てのことが困っているというふうには、地域で見たときに見えないんだと思いますね。いや、もう大変なんですって。もう、どんどん新しい人たちが入ってきて、皆さん、マンション、アパートで生活しているんですよ、と。一戸建ての土間のある家に住んでらっしゃる大家さんなんですね。やはりそういう方々には、なかなか今の、新しく入ってきた子育ての方たちの状況って目に入ってこないんだと思います。でも今、そういう話をしたら、そうかと。じゃあ、ちょっとね、うちの土地を提供して建物建ててあげようということで、建てていただきました。お向かいが、実は、仏教系の幼稚園。その幼稚園のですね、いも掘り畑の場所だったところです。駅から徒歩8分で、便利もとてもいいところなんですけども、まだまだこういった自然環境が残っているところで、そこに下が200平米、上が100平米。ちょっと小さな園庭もあるんですけども、それを最初から建てることができました。それを建てる時には、私たちがこうしてほしいというように思いも込めて設計もしていただきました。この奥のほうに和室があって、赤ちゃんのコーナーがあり、手前がちょっと大きい子たち向けのフローリングの広場になっています。ガラス窓の向うには、ちょっとした園庭があって、それで野菜、ちょっとした野菜づくりをできるような畑もあります。

子育て情報の共有

そのなかでは、私たちは当初より、学生さんのサポートを非常にたくさん受けてまいりました。ここでは、真ん中で入っているのは、「ボラリーグ☆こうほく」という事業なんですけど、私たちが行政との連携でできること、それから自分たちだけで自主事業としてやること、それから企業と組むこともあります。いろんなパートナーを持って、その目的は、子育て家庭にとって、サポートになるということです。誰と



子育て支援拠点 だろっぷ

パートナーを組めばそれができるんだろうかということを考えながら事業をしています。一つ上ですね、メルマガっていうのがあるのですが、メールマガジン「ココメール」っていうのは、これは「どろっぷ」の事業に付帯している事業なんですけれども。今、若い人たちは、情報をキャッチするのも携帯メールなんですね。それで、気持ちとしては出てきてほしい、フェイストゥフェイスの関係になってほしい、出てきてくれたらつなげることができると思っています。ですけれども、なかなか出てくることができない人たちが問題であるということを、さまざまな方から言われます。その通りだと思います。そういった人たちを地域とつなげるために、このメールマガジンというものをやっております。今、港北区では毎年 3000 人ずつお子さんが生まれるんですが、このココメールは、まだ小学校入るまでのご家庭なんですけど、6000 人以上の方が登録をしてくださっています。毎週 1 回、情報発信をしています。去年、新型インフルエンザがはやったときに、実は私たちの施設も 2 週間お休みになりました。あと、保健所の検診ですね、4 ヶ月健診とか 1 歳児健診、こういったものもお休みになったんですが、このココメールでいっせいで配信することで、そういった情報をバナーと伝えられるということがありました。これは行政情報だけでなく、内容を精査して民間情報も入れております。年齢別、地域別で情報を提供するというかたちです。これはあくまで地域のお母さんたち、とにかく顔の見える関係につなぎたいという思いで、出てきてもらうためのツールとして活用をしている部分です。

あとは、2、3 歳児の、プレ幼稚園みたいなものかなと思うんですけども、グループ保育というのもしています。今は働いていないと保育園に入れないんですね。私たちが広場で見ていると、このご家庭にはお子さんをちょっと一時的に見てあげたほうがいいなあ、2 人目が生まれたばかりですとか、3 歳と赤ちゃんでお母さんがとにかく大変な状況だという人たちですね。もう、2、3 歳になるとグループで活動ができるということもありますので、そういった子どもたちの集団保育の場です。広場で見せる子どもの表情と、このグループ保育で見せる子どもの表情が違うということがよくあります。これはお母さんたちも保育に入ってもうらことも可能になっていて、それでやはり、子どもたちの集団っていうところで見せる姿っていうのを親たちにも感じてもらいたいなあという思いもあります。もちろんこれをする中で、親御さんはちょっとした用事がたせるとか、下の子と十分遊べる時間が持てるということも狙っています。それから幼稚園・保育園ガイドについても、これも 50 人ぐらいの親子ボランティアのお母さんたちで編集しています。100 園以上の幼稚園、保育園の情報を掲載します。これは、いわば地域の幼稚園、保育園の信頼関係を作っていくということでもあります。最初は、なんか情報を出すのをすごく渋っていたというか、なんでそういうのが必要なのかっておっしゃっていた園からも、お母さんたちの視点を高めるということであればいいんじゃないかということでご協力いただきながら、紙面づくりをするようなかたちになっています。やはりその園を選ぶ視点という親の視点づくりというところを重要視した冊子構成になっているので、園の情報だけではなくてそういったものを入れ込む。それから広告も 150 万ぐらい、地域の企業さんからい

ただいているんですが、それも皆さんは、港北区の子育て支援を応援するというメッセージを、いただきながら掲載をしていただいています。そういった意味で大きな企業はないんですが、地元の小さな町の本当に美容院だとか、それから小児科だとか、そういったところをお母さんたちが口コミで、足を運んで営業して広告もとるといようなかたちになっています。もうみんな、ほしいのは東京や横浜の大きな情報じゃないんですね。足元の情報がほしいんです。そういった意味で、この幼稚園、保育園情報をつくりながら地域の企業との連携ということも視野に入れています。先ほど、携帯メールと言いましたが、港北区の社協さんと、こういったウェブサイトの運営もさせていただいています。あと、この下は実は地元のお寺さんで、朝5時からの坐禅に行ったときにおかゆをいただいているところなんですけども、こういった本当に、横浜も古くからの寺院とかもあって、まち歩きをすごく熱心に行っている年配の方々とかいるんですね。鎌倉街道を歩きながら、道祖神とかを見ながら、子どもも親もまちを発見する。そういう、やっぱり新参者の私たちです。そのまちは子どもにとっての故郷なんだということを考えながら、こういう地域の人たち、地域のいろいろな古くから活動しているところも含めて連携ができればいいなという思いでおります。

ボランティアの育成

次にボランティア育成事業は、社会福祉協議会と、それから区役所と私どもが事務局になって、学生さんの募集と研修をして、逆に幼稚園や保育園、それから公園遊び、こういったところに出向いて行ってもらっています。皆さん、学生のボランティアさんに来てほしいんですね。ですけれども、直接研修もせずに、自分たちが募集をするということにはとてもハードルがあるので、募集や研修は行政と私たちが一体的にやりまして、そして出向いて行くところまで私たちが行きます。そして1回目はコーディネートして、それからレギュラー、公園遊びの方々と一緒にやっていただくというかたちで、区内で展開している事業です。これは皆さん自主的に来ます。みんないっせいに行けということではなくて、自分たちがやりますと手を上げて来て下さる、中学生から大学生で構成されています。それと子育てサポートシステムという預かりの仕組みも、この7月から受託を始めております。これは社会福祉協議会がやっていたんですが、親子が集まる場所でやったほうが効果的であろうということで、それで、私どものほうでさせていただくことになっております。今どこの市町村も、支え手側が少ないんですね。私たちは、お子さんが小学生ぐらいになったら、ぜひ今度は担い手になってほしいということで、若い人たちの支え手を増や



していきたいという思いもあって、私たちがこれを受託して、預かり手をどんどん若い人たちにもやってもらいたいという思いで、活動しています。

学生さんの訪問事業というのもやっ

ていて、本当は学生さんたちのベビーシッターなんていうのは諸外国では当たり前ですよ。今、母親になった人に聞くと、二人に一人は子どものおむつを替えたことがない、ミルクをあげたことがないというのが現状です。それだけ子どもを育てるという日常的なことを体験せずに親になっています。隣の子育ても見ないまま親になっています。どこかでそれを断ち切らなくちゃいけないと思うんですね。ですから、広場のなかでたくさん学生さんを受け入れて、小さい子どもたちと遊んでもらう。それもイベントではなくて、普通の日常のなかで関わってもらおうということを大事にしています。そこで経験を積んだ学生さんたちに、家庭にまで行ってもらいます。家庭に行くと、もっとより深く家庭の状況が見えるんですね。今の学生さんって、自分が育った家庭のイメージしか持てないと思います。いろんなご家庭を見ることで、バナナのあげ方も違うねとか、いろいろその子育ての家族の考え方っていうのにも触れて、学生さんたちはお母さんたちはすごいねって思って帰ってきます。いや、お母さんたちはすごいっていうだけじゃなくて、あなたのお母さんもすごかったのよっていうふうに伝えたいなって思うんですが。やはりその育てられたっていうことについて、もう一度振り返ってもらって、そういう経験にもなるかなと思いますし、親たちにとっては第三者が入る、いいきっかけなんですね。やはりどうしても、親たちはいい子育てをしなくちゃいけないというプレッシャーがあります。実は、学生さんたちを家に上げるのは結構ハードルが低いんですね。最初、掃除機かけてきれいになってお迎えしてたご家庭も、結構とても心を許しやすいっていうんでしょうか、どんどん子どもたちは学生さんと仲良くなって、そしてクリスマスだとか、誕生日にも来てっていう関係に発展していく。だから私は、もうこの年配の人にもかかわってもらいたいし、学生さんたちにはどんどん子育ての現場に出てきてほしいという思いで、こういった活動を学校のご協力をいただきながらしています。

温かいつながりのできる環境づくり

びーのびーのとして大切にしてきたことというのは、温かいつながりのできる環境づくり、子育ての第一歩を温かく応援していこうということと、それから本当に地域にどっぷりつかって、地域に根差してやっていこうということです。それから親の視点というのを大事にする。子どもが育つ環境ということを大事にしていく。そして循環型支援です。もう本当に、まちというのは循環なわけですから、支えられたものが支え手になるっていう循環を、子育て広場から発信していきたいと思っています。それから、そういった活動がどんどん地域に、全国にも広がっていきなかで、その横の繋がりを、手を取りあってネットワークを進めていこうというようなことです。というのは、若い世代はとにかく転勤するので、転勤した先でも幸せであってほしいという思いがあります。ですから、行き先どこって聞いて、どこそこって言ったら、そこの支援拠点、私たちのネットワークの場所をご紹介します。そうやって全国にそういった種が、どんどん広がって行って、子育てがしやすいまちが広がってくればいいなと思っています。ここでは高校生が子どもたちと泥

んこ遊びをやっています。これは県立高校の学生さんたちですけども。今 35 時間でボランティア単位が取れるんですね。今年も 10 人かな、学生さんが単位を取得していきました。保育系の学校に進む高校生たちです。今、家庭科の授業から何から、文化祭でも私たち妊婦体験キットを持って行って、男の子の学生さんにも妊婦体験とかしてもらったりして、高校との連携っていうのも進めています。あとシニアの皆さんにも来ていただいていて、定期的に来てくださるので、とても助けられています。こういった木のおもちゃなども制作して入れてくださったりしています。あとは今日はちょっと時間がないのですが、こういった広場の中間支援で研修だとかネットワークづくりをする中間支援組織を今後立ちあげて、こちらのほうの代表も、させていただいております。

本当に生きるということ、そして死んでいくということ、生まれるということ、その循環のなかで、どこかで何かを伝えていかなくちやいけないんですが、そのなかで私たちの役割は、赤ちゃんが生まれたっていう、その家族から地域をつなぐ、行政につなぐ、そういう取り組みなんだと思います。そこにいろんな世代の人を巻き込み、地域を巻き込み、行政を巻き込んでやっていくことだと思います。それはいろんな人たちのまちづくりであったり、高齢者支援であったり、いろんなことをされていると思うんですが、もう結局根っここのところはきっと一緒なんだろうなあと思います。だから子どもが生まれるという、そのきっかけをうまく活用して、それを育てていきたいというのが私たちの活動かなと思います。私自身も子どもが生まれて生活が 180 度変わりました。もう時間の流れも変わった。社会の弱さも目に付いた。だけど逆に人の温かさも知ったし、本当に親に感謝しました。その子どもが生まれたことで私に力が生まれて、このような活動をすることができた。世界をぐんと広げられたという意味で、子どもの力っていうのはすごいなっていうふうに思っています。先ほど、ちょっと話がありましたけども、今、国の制度が大きく変わろうとしています。そのなかで、実は「にっぽん子育て応援団」という活動を立ちあげて、もっといろんな人たちで子育てを応援しようという活動を、去年 5 月に発足して活動しています。よかったら、ホームページなども見てみてください。今、国の制度をかかわることが、どういうふうにそれが反映されるのかというのを、ウォッチしなくてはいけないと思って活動しているところです。これが政府の提唱している「子ども・子育て新システム」というところです。まだこれをご存知ない方もいらっしゃると思うので、ぜひみてください。

私たちのこの子ども環境は、今、大きく動こうとしています。それにやはり自分たちが活動してきた思いっていうのを、どれだけ入れられるかっていうことがとても重要になってくる。子育てをサービスにはいけない。地域の支え合い、ソーシャル・キャピタルをどう作っていくか。私たちが今までやってきた、この 0 歳から 3 歳の育み合いっていうところを、この仕組みにどう入れるかっていうところが、私に問われている、今一つの大きな命題です。新システムの策定にあたっては、一応、基本制度ワーキングの委員もしております。今、幼稚園と保育所の一体化のことが、非常に注目されているんですけども、それだけではない、もっと大きな流れを変えていかななくてはならない。チャンスでも

ありピンチでもあるんですね。そういった意味で、ここにぜひいろんな思いを届けなくてはいけないと感じているところです。新しい家庭をどう受けとめるか、将来を見通してどういう公的に関わるか、乳幼児期の子育て支援ということが、子どもの危機を救うと私は思っています。子育て家庭のリスクに対して予防的に関わる、そういった支援だと思っています。子育てには、時間も手間もかかる。だからこそ大事なものだというふうに思っていて、これは子どもだけの問題じゃなくて、社会すべてに大きく関わる問題だと後から気がつきました。本当に私なんか後からなんですけども。子どもはおとなに多くのことを気づかせてくれる存在であり、子どもは親や社会に幸せをもたらしてくれる存在である。少子化社会であることに、もっと敏感でなくてはいけないんじゃないか。子どもが大切にされない社会に未来はないのではないか。子どもにとってのふるさとづくりということについて、私たちおとなの責任っていうのが問われている、そういう社会だと思っています。ありがとうございました。

矢野智司教授

どうもありがとうございました。戦後、一番たくさん子どもが生まれたときは270万人でした。今110万人ですので、本当に圧倒的な少子化社会になってしまいました。お話をかがっていて、受動的なサービスを受ける人から転じて、自分が積極的に、たまたまそこに住んだ場所を、改めてふるさとにつくり替える、そういった住人になるための、ヘルプを子どもとのかかわりを通してやってくれます。そういう場所を提供されたんではないかなというふうに思います。お三人の話、それぞれつながることが大変多いと思いますので、後半に続きます。

《討議》

秋田光彦さん

日課というのは宗教の言葉です。日々それを自分に課するということによって、それを繰り返し自分の身体ににじみ込ませていく。いわゆる教えたり伝えたり、そして、その子の自発性にゆだねるといいながら、放任状態に置くというかたちではなく、その子の自発性がいかに引き出されるかという環境をつくっていくための日課活動。これがうちの保育活動の看板です。体育ローテーションとって、いわゆるサーキットトレーニングのようなこともありまして、これもご覧になりましたら、子どもたちの持っている、内にある躍動感というものを感じ取っていただくかと思います。また別の言い方をすると、非常に知的な早期教育というふうな誤解もあるかもしれません。武道の世界に、守破離っていう言葉ありましたね。あの守破離っていうのは私なりの解釈をすると、自律の前に他律があると思っています。要するに私たちの自律思考っていうのは、まず自律思考はインディペンデントの自律思考ですが、その前に初めから、人間は自ら律されているのかというと、

そうではないと。むしろ一つの型とか、一つの規範、一つのルールの中に、私たちは他から律されていく。その律されているなかで、自らの自律というものに目覚める。そして本当の自律、私は守破離というのをそのように解釈しているのです。そういう原点、自律や自律に向けての原点の他律主義みたいなものを私たちの中心にしている。ただ、その他律の根幹は誰かという、それは仏です。仏教教育というのはそこが芯なんで。それは何かの理念、理論というものの先立つ前に、仏の誓願、仏の願いがそのように私たちを導いてくださっているというふうに考えています。個人と集団というものの、響きあいというのがうちの保育の魅力なんです。詳しくは、斎藤孝さんが『子どもの集中力を育てる』という本を書いておられます。文藝春秋文庫から出ておりますが、この本の半分ぐらいはうちの幼稚園のことを書いています。斎藤先生が、結構注目してくれたので、評判になりましたので、よかったら参考にしてください。

もう一つは、ちょっと私はなかなか答えづらい部分があるんですが、「都会の真ん中でされているので、自然から切り離された都市空間での子育ての難しさはどのように乗り越えていけばいいのでしょうか」と。なかなか答えにくくて、自然というのは一体なんなのかってことなんです。子どもたちの教育でいえば、確かに自然、野外活動ってというのはたくさんあります。山のほうに出かけて行って、夏や冬ですね、いわゆる林間学校もあるんですが。私なりにちょっと答えさせていただくと、自然というものは実は、私たちのなかにあるんじゃないかという、内にある自然といいますか。私たちの本来心のなかにある、私たちは仏性といいます。私たち自身が、自分たちの菩薩としての可能性を抱えている。そのことに気づくことが、最も自然に近いことではないかなというふうに思います。その仏性というものに目覚めることなく、私たちはシステムの子供として育てられてしまうという危険性を十分にはらんでいると思うんですが、その菩薩としての自らの育ちをどのように育てていくのかということが、いわゆる空間論としての教育以上に私は関心を持っています。都会の真ん中の幼稚園で、なかなか里山教育ってというのは難しいんですけども、そういう意味での回答を期待されているなら、ごめんなさい、ちょっと上手に答えられません。

梅田美代子さん

先程、自分のなかに自然があるというお話が出ていましたが、こども芸術大学の理念のなかにも自然という言葉が出てきます。母なる大地です。環境としての「母なる大地」とどまらず、一人一人の心のなかに、慈しみの気持ちや優しい気持ちを芽生えさせ、他者を感じ、想像し理解することが大切なのだと言っています。そして自分で考えて行動できる、そう言うことができる子どもたちを育てることが未来に対する希望であり、私たちの希望だと思います。保育の方法は違いますが保育の基本は秋田先生のお話の中にも同じようなお話があって「あっ、なるほど、一緒、一緒」と伺っていました。

私のところにひとつアンケート来ています。「社会でのコミュニティが希薄化し、家族

だけで解決できないようになってきたという話がありましたが、どのようなところに原因があると思われますか」と。私がお答えすることかどうか分かりませんが。今、私たちのこども芸術大学を見ていますと、大半が核家族が多いです。おじいちゃん、おばあちゃんたちと関わるのが少なくなってきたように思います。私が子どもの頃は、地域に育てられていたという感覚があって、私がどこかから帰ってきても、近所のお年寄りやご近所さんに声をかけられて、何々ちゃん、今日はしんどのいのか、どこ行くのか、他所の子どものこともよく見てくださっていたように思います。そういう意味でも今は町のなかでおとなたちが子どものことをちゃんと見られない環境や社会状況のように思います。今日も「子育ての危機に迫る」というテーマですが、私はいつも子どもの問題はおとなの問題だと思っています。おとながどのように子どもを育てていくのか、子どもとどのように接していくのかということ、真剣に考えないと、なかなか社会は変わらないし、親子関係や人間関係も変わらないように思います。私は制作系の人間なので作品づくりが殆どですが、作品づくりは自己の心のなかにあるものや自己の気づきをカタチにして社会に発信していくことで確立していくと思っています。私は創造することの意味を子どもたちから教えてもらっています。こども芸術大学のように子どもを育てる場面に親やおとなが入るということは、決して特別なことをしているとは思っていません。普通に生活する中でもこれからの社会を築き、未来を担う子どもとして子どもをおとながしっかり見て、寄り添うことができれば、多くの気づきを得ることができるように思います。その気づきを得たおとなとおとなたちに育てられた子どもが増えることこそが社会で起こっている様々な問題解決につながるのではないかと思います。

奥山千鶴子さん

先ほどちょっと自然の話があったので、うちの広場は商店街のほうは、レンガ敷きの商店街なので、あまり緑があるって感じではないんですが、それでも三輪車とかを乗りまわして、たくましく子どもたちは動き回っているんです。やっぱり、どこでも子どもって遊びを発見するなあっていうのは、とても感じます。でもその自然っていうか、緑っていうところをなんとか取り入れたいなあという思う意味では、食を通じてということですね。保育園とか幼稚園に入れば、一緒にご飯が食べられるんですが、乳幼児期ってお家でマンツーマンで、なんか会話もなく食べるみたいな感じになっちゃうので、広場でみんなでお弁当を食べる。そのときに小さな畑なんですけど、冬だと大根とか植えてますので、大根の葉っぱのみそ汁だけでも出すとか。夏にはきゅうりの漬物を出すとか、そんなようなことで、少しでも何かできるといいかなあというのがありました。

私の方に与えられた質問はですね、「親の成長にとって地域とのかかわりというのは、どのような形でありますか」ということなんです。実は商店街の広場の小さな自主事業から、「どろっぷ」という委託事業に変わったときに、委託っていうのは公的な資金がかなり入るし、利用料も無料です。それでそのときにやっぱり自分たちが来てほしいような

親御さんっていうのかな、行政の委託でやったときにはね、無料なので多様な人が来て、私たちは地域に目を向けられてなかったなあと思いましたね。外国人の方ですとか、やっぱりかなり経済的に厳しいかもしれないなあという方から、お父さんも来ますし、いろんな方が来てくださって、これまでの私たちの会員制のひろばだけでは、視野が狭かっただけになって思いました、本当に。だからこそ行政と一緒にやってやる地域の子育ての家庭っていうのは、多様な子育て家庭がいて、それに対応できるスタッフでなくては行けないと、改めてもう一回見直すということがあったんです。どろっぷを建ててもらったときに、地域の人のご支援でというのがあったんですけども、それでも港北区 30 万人いるですよ。30 万人いる港北区に、その公的な場所が一か所しかないわけです。それであまり地元の町内会とべたべたお付き合いするのどうかっていうことで、地域の連合町内会とかとそんなに密にしてなかったんですが、実はこの春に 2 期目の受託（5 年に一度）というのがありまして、町内会の方が審査員に入ったんですね。そしたら、あなたたちは地域との関係ができてないんじゃないかということ、すごく言われたんです。いや、行政からは区内に 1 か所の、13 ヶ所連合町内会あるわけです。だから特定の自治会とあまりお付き合いするのどうなのかという話もあって、そうしてなかったんですが。審査会のときに厳しく言われまして、最初の 5 年は中身を詰めるということでやってきたけれども、これからの 5 年はもっともっと地域と連携しようということで、スタッフも方面別担当っていうのを決めました。そしてその地域の主任児童員さんや子育てサロンなどに出向いて行きました。また、主任児童員さんの研修を全員受けていただくということで、どろっぷに来ていただいて、どろっぷの活動をみていただきました。ですから、これだけ 10 年やってきても地域ってことについては、まだまだやらなくちゃいけないことがたくさんあるし、地域の子育て家庭は多様であるっていうことを、毎日毎日突き付けられているっていうのが現状なんです。親たちは広場のなかで、もう大丈夫だと思うとどんどん巣立っていきま。早く出て行ってくれっていう、そういう場所なんですね。そういった支援ができて、実は卒業してほしい、そういう場所です。ということは、受け皿となる地域のほうで、それを受けとめてほしいというところもあるので、私たちはボランティアさんや学生さんをどんどん入れて、そしてまたまちで会ったときにこんにはって言える関係にできるように、とにかく逆に地域につないでいくっていうようなことを、これからの 5 年というのを目標にして、この春から活動を始めたところです。

秋田光彦さん

ちょっと僕の話が、どれだけ皆さんに届いたかわからないですが、宗教の世界で言うと、俗と聖という 2 元的な世界なんですね。聖というのは、もう向こうに行っちゃったっていうか、たとえば彼岸の世界なんです、あっちに行っちゃうっていうかたちなんです。実はその近世までの日本人の考えっていうのは、聖と俗っていうものが実は矛盾なく混在していたんじゃないか、行き交っている関係だったんじゃないかと思うんです。たとえば、

これは日本じゃないですが、古代のインド人の考え方に、四住期という考え方があります。仏教以前の古代のインド人のライフサイクルなんですけど、四つの時期というのは、一番最初は家住期といって家に住む。二つ目は学生期といって、師匠について学ぶ。三つ目が林に住むと書いて、林住期といいます。そして四つ目が行に遊ぶと書いて、遊行期といいます。最初の家住期はまさに、家に住むわけですね。二つ目の学生期というのもよくわかりますよね。この三つ目の林に住む、林住期っていうもの、大変な注目されるわけです。最近、五木寛之さんなんかも『林住期』っていう本を書いていますけど、簡単に言うと家とか学校とかそういう世俗をいっぺん捨てなさいという話なんですね。そういう世俗をいったん捨てて、そうじゃない視点を獲得することによって、林というのはそのシンボルかもしれませんが、新しい価値観を獲得していく。そういう古代インド人のある種のライフサイクルを見たときにふっと僕思うんですけど、子育ての時期ってどの時期なのかなと思うんです。一見私たちは、家に住んでいるんだから家住期だろう、あるいは幼稚園に行っているんだから学生期だろうと思うのですが、ひょっとしたらもうちょっとトータルで言うと、子育てのある一定の期間っていうのは、林に住んでいる林住期っていうのを獲得しているんじゃないかというふうに思うわけです。つまり、いわゆるそれまでの世俗のシステムとか、たとえばお母さんと付き合っていて、本当にみんなキャリアバリバリです、そういう自分をいっぺん捨てるわけですね。捨てることはとってもそれはマイナスで、失点なんかじゃなくって、いったんそういう世俗なるものと、いったん手を切る。脱俗している。そのなかで自分の独特の視点を獲得することによって、もう一度家族とかその学びとかっていうものをとらえ直していくという、そういう視点ですね。ただ、順番に階段上がって行って、成長して、屋上に上がるというよりも、そういう四つの時期を、行ったり来たりしながら往還しているような仕組みとか流れのようなものが、もっと自由にあってもいいんじゃないかなと思います。タイのお坊さんの中にはいったん世俗で仕事をしながら、有給休暇もらう人がいますが、一定期間頭をそって、僧院に入るんです。3ヶ月ぐらい修行をするんですけど、また還俗といって元に戻ります。そういうやりとりを一生のうちに何回か保証されているんです。育休とか産休とかっていう仕組みも、ひょっとしたら、今はどうしても社会保障とか、労働施策としてとらえてしまっていますが、実は何かからいっぺん降りて、降りることによって一つの価値観や力強さを得る。それをもういっぺん戻ったときに、元の鞘に戻るっていう意味じゃなくって、戻った私は前の私とは違うというような、新しく再生、生き直しのようなステップを、もう少し描けたらええのになあっていうふうに思っています。

奥山千鶴子さん

まさしくそれだなんて思いました。だからパパたちもじっくり休んでほしいなあって思うんですよね。どうしても母はそういう意味では、とにかく 24 時間待たなしの子育てで、もうそうせざるを得ないっていうところがあるんですけども。なかなか夫婦で話し

していても、夫の方はですね、そこから抜け出すことができないというところがあるので。そういう意味で、いったん、そこを子ども・子育てを中心に、もう一回見直すというのが大事だなと思います。その見直すといったときに、どうやって見直すかという、やはり自分が子ども時代のことを振り返ると思うんですよね。自分がどう育てられたかということに、立ち戻るなあとと思います。うちの両親は決して裕福な家庭ではなかったですが、掃除をすとか、きちんと毎日暮らすということを大事にしてきた両親です。そのことを今、とても感謝しているんです。暮らしていくということです。それを今、自分が子どもに見せてあげられているんだろうかということ、とても自分でも感じる。親世代ができないんだしたら、ぜひそれをちゃんとまだ身につけているシニアの方々は、もうバリバリと畑やるにしても何にしても身につけているので、そういう支援をしてほしいなあと思ったりしています。子どもの記憶というか、自分自身も一番古い記憶はなんだろうと思うと、やはり子ども時代のいろんなことを思いだすんです。それが原点で、子どもを育てるときには、思い出して育て直し、育ち直しをするなあと、今日秋田先生のお話を聞いてまさにそう思いました。

桑原知子教授(京都大学大学院教育学研究科)

本当はいつまでも、お話をおうかがいしたいところですけども、時間がきましたので、最後に私のほうから、少しまとめをおこないたいと思います。今日は、秋田さん、梅田さん、奥山さん、本当にありがとうございました。貴重なご報告をうかがえて、会場の皆さま方がどう思われたかわかりませんが、私はですね、なんかすごく元気になりました。なんとなく生き生きとした感じというか、元気をもらったような感じがして、たぶん、こういうことが、この感じが、「子育ての危機」というものに対して、非常に大事なんだろうなあっていうふうに思ったんです。だけど「こういう感じが」ではだめですので、もう少し私が感じましたことを言葉にしてみたいと思います。

まず子育てというときの子どもについてです。子が入っていますが、子どもっていうのは一体なんなんだろうなあっていうことを思います。さっき最後に奥山さんが言われたように、おとなのなかに必ず子どもがあると私も思います。子どもじゃなかった人はどこにもいないので。私たちのなかにある子ども、あるいは、もう一度関係をつくり、そして関係を切ったりする、一つのつながりの原点になるようなものが、子どもかもしれないというふうにも思っています。そういうものと、どう関係を付けていくのかということが、たぶん子育てっていう



ことだろうし。これは秋田さんの言われた言葉で思いましたけれども、子育てという、普通の人はお母さんが子どもをとか、お父さんが子どもをっていうぐらいにしか感じないわけですが、そういう一方向ではないということですよね。子育てというもののなかに、つまりこれは関係の問題といいますか、そのなかに誰がとか、どっちからとかじゃなくって、必ず両者に影響を及ぼし合うようなものが、子育ての問題であろうかと思いました。

今回のテーマは「迫る」と書いていて、解決と書いてないところがなかなかミソだと思うんですけども、普通は、例えば虐待問題だと、原因は何かとか、どうしてなくすかということに議論がいきますが、なかなか虐待というのはなくならないと思います。虐待というとお母さんが悪いって思われる方が多いのですが、私たちが心理臨床でお会いしておりますお母さん方のお話を聞いておりますと、ご自分自身が虐待を受けてこられた方が多いわけですね。そうすると悪い人は、お母さんじゃなくって、おばあちゃんですよ。そのおばあちゃんはまた、虐待を受けておられたわけですから、その前の、悪いのはひいおばあちゃんですよ。ずっといったら、イザナミぐらいになるんじゃないかなあ。ほんまに悪い人を変えようと思ったら、イザナミを連れてこなあかんってなったら、難しいわけです。あるいは、子どもがお母さんを捨てればいいっていうふうなことを言う人がいますが、自分の体のなかに、血液のなかに流れているものを捨てることなんかできないと私は思います。そう簡単に、何かをやるとか、原因を調べるとか、切るとかいうことではうまくいかない。かえって「つながり」っていうことを、もっと直視していくことしか、ここに迫るものはないんじゃないかなというふうに思いました。

そのなかで、一つ今日ヒントをいただいたと思われたことは、「境界を超える」ということです。先ほど言われました、聖と俗のもっと混在していたような時代から、今に至って違うこと、そして固定した枠で考えているということからもう少し自由になる発想がありうるということも、一つのヒントかと思いました。子どもさんが行くのが大学なんですよ。そういうところとか、あるいは、あの写真見ていましたら、お母さんのほうが生き生きしているような気がするんです。だから役割というんですか、母は母であらねばならないとか、子は子でならねばならないという役割、あるいは自分の子と他人の子、そういう非常にクリアーな境界というものを越えること。あるいはもう少し言えば、たぶん自分を超えたものとのつながりということ。そういうことを知らせてくれるのが、子どもじゃないのかなというふうに思いました。あるいは、今ある境界を崩していくというふうに言えるかもしれないと思います。

それから「危機」なんですけれども、危機というのはチャンスであろうと思います。私自身の領域でも、阪神大震災のあと、非常に大きな変化がございました。あその後いろんなことがあり、相談室が固定したもので、特別な人だけのためであった心理臨床が、とても広い領域に広がりました。いろんな意味で、この固定した役割や境界を崩すということが、この危機の際に起こったような気がしています。それから実際、現状を見ますと、すでに崩壊した家庭が、かなり増えてきたと思います。学校でも、片親家庭とか、養育能

力のない家庭がどっと増えています。私は家庭裁判所の少年事件なんかにもかかわっておりまして、いろんなケースを聞きますと、ほとんど「家庭」に力がございません。お母さんにこうしてほしいと望んでも、全く希望がない。そういうときに調査官たちは、どういう考え方をするかと言いますと、「資源」という言い方をしまして、どこからでもいい、何かその資源になるものを探していくんですね。必ず世の中にはそういうものがあって、理想を目指してこれがあかん、あれがあかん、何が問題やっというのではなくて、資源のなかから、どっからでもいい、何か得られないか。それはどこでもいい、誰でもいいという考え方をしています。今日、お聞きしていて、ちょっとそれに近いような感覚を得ました。そのなかで絶対大事なのは、本人の力なんですね。少年事件の問題を起こした子。何が悪いとかじゃなくって、その子のなかに何が潜んでいるかっていうことを探すんですね。本当に子どもっていうのは素晴らしい力を持っていると思いますし、遊びってうまく自分で見つけますよね。そういう力というのは、私はおとなになったらどんどんあせていくような気がしていますが、もう一度私たちも触れたいものだというふうに思います。それからもう一つは、プロセスを大事にすること。遊びが大事で、いろいろ現実になると難しいのは、日本人の場合だと上手な絵を描くとかということばかりになると思うんですが、そうじゃない、答えがない、そういう作品ではないもの、そういった発想に、もう少し私たちも慣れることができたかなあとも思います。あるいは、私たちの領域ですと、原因→解決ということばかりになります。そういうことじゃない発想という部分に対して、もう少し私たちが慣れていきたいというふうに思っています。

ただ最後、一方で、実はあまり表面に出ていなかったような気もしますが、秋田さんが言われたように、単に自由にするとか、なんでも支えてあげるとか、そんなものじゃないというところがミソだと思うんです。今、問題になると思うのが、一方の議論のなかで、こっちは任せっきりでいいのか、みんな助けてくれるんやと。じゃあもう親はどうでもいいのか、親の責任はどうなるのか、コミットメントとか、そういうことがどうなるのかという議論が、やはり抜けないと思うんですね。それはこれから考えていかねばならないんですけれども。好き放題にさせたり、何でも周りがヘルプして助けてあげればそれでいいというのでは全然ないと思うんです。気づきの時間が設けてあったり、あるいは三日と言われましたが、そういうものがあったり、あるいは経済的に難しいとだとか、そういうリミットは、逆に言えば支えてくれるところがあるんじゃないかと思います。そういった、かなり難しい関わりというものを考えるときに、いろんな側面を考えないといけないと思います。そういうことも考えつつ、それを今後の課題としたいと思います。今日は力をいただけて、私としては本当にありがたいと思っておりますし、今後につなげていきたいと思っております。最後にもう一度拍手をお願いしたいと思っております。ありがとうございました。

(文責・吉田正純)